
薬屋のひとりごと

うりぼう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薬屋のひとりごと

【著者名】

Z9636X

【作者名】 つらぽん

【あらすじ】

薬草を取りに出かけたら、後宮の女官狩りに遭いました。

花街で薬師をやっていた猫猫は、そんなわけで雅なる場所で下女などやっている。現状に不満を抱きつつも、奉公が明けるまでおとなしくしてこようと思つたが、彼女の好奇心と知識はそろはせない。

ふとした事件を解決したことから帝の寵妃や宦官に目をつけられる

ことになる。

早く市井に戻りたい、 猫猫はきょうも洗濯籠を片手にため息をつくのだった。

(露天の串焼きが食べたいなあ)

雲天を見上げて猫猫は溜息をついた。
周りは自分が今まで見た中で最も美しくきらびやかな世界、そして
瘴氣蠢く濁つた濁の中だった。

(もう三ヶ月があ、おやじ、飯食つてんだろうか)

先日、薬草を探しに森に出かけてみれば出会ったのは、村人その壱、
式、参という名の人そらいでした。

まったく強大で迷惑極まりない結婚活動、略して婚活、宮廷の女狩
りである。

まあ、給金はもらえるし、一年ほど働けば市井に戻れなくもないの
で、就職先としては悪くないのだが、それは個人の意思で来た場合
である。

薬師としてそれなりの生活をしていた猫猫にははた迷惑な話なのだ。
マオマオ

人さらいどもは、妙齢の娘を捕まえては宦官に売り酒代を稼いだか、
それとも己の娘の身代わりにさせたのか猫猫にはどうでもいい話で
ある。どんな理由があれ、とばっちりを受けたのは変わらないので
ある。

でなければ、後宮なる場所に一生関わりたくなかつた。

むせ返る化粧と香、美しい衣に纏つた女官の唇には薄っぺらい笑み

が張り付いていた。

薬屋をやってきて思うこと、女の笑みほど恐ろしい毒はない。
それは殿上人の住まう御殿も城下の花街も変わらないのだと。

足元に置いた洗濯籠を抱え、建物の奥に向かつ。表とは違い、殺風景な中庭には石畳の水場があり、男とも女ともつかない召使たちが大量の洗濯物を洗つていた。

後宮は基本男子禁制である。入れるのは、国で最も高貴なかたとその血縁、あと大切なものを失つた元男性だけである。もちろん、そこにはいるのは後者である。

歪だと思いつつ、それが利にかなつてゐるからやつてゝることなのだろうと猫猫は考える。

籠を置くと、そばの建物の中にある並べられた籠を見る。汚れ物ではなく、日の当たつた洗濯済みのものだ。

持ち手にかけられた木札を見る。植物を模した絵と数字が書かれてゐる。

女官の中には字が読めないものもいる、なんせ人さらいのじとく攫われたものさえいるのだから。富廷に連れ込まれる前に最低限の礼仪くらいは教えられるが、文字となると難しい。識字率は田舎の娘で半分越せばいいほうなのである。

大きくなり過ぎた後宮の弊害といえる、量は増えたが質が悪い。

先帝の花の園には到底及ばないものの、妃、宮女合わせて二千人、宦官を加えると三千の大所帯だった。

猫猫はその中で最下層の下女であり、官職すらもらっていない。特に後ろ盾もなく、攫われて数合わせにされた娘にはそれが妥当なところである。まあ、牡丹のような豊満な肉体や、満月のような白い肌でも持つていればまだ、下妃の位につける可能性もあったかもしれないが、猫猫の持つのはそばかすの浮いた健康的な肌と枯れ枝のような手足ぐらいである。

(はやく仕事終わらせよう)

梅の花と『壱七』と書かれた札の籠を見つけると、小走りに歩く。重く曇った空が泣き出す前に部屋に戻りたかった。

籠の洗濯物の主は、下級妃嬪である。与えられた個室は他の下妃に比べ調度の質が豪華だが派手すぎる。部屋の主は、豪商の娘かなにかと予想される。位持ちともなれば自分専用の下女を持つことができないが、位の低い妃はせいぜい一人までしか置くことができない。ゆえに、猫猫のような特に仕えるべき主人のいない下女がこうして洗濯物を運んだりするのである。

下級妃嬪は後宮内で個室を持つことを許されているが、場所は宮内の端にあり、皇帝の目につくことはめったにない。それでも、一度でも夜伽を命じられれば部屋の移動ができる、一度目の御手付きは出世を意味している。

一方、食指を動かされることなく適齢を過ぎた妃は、よほど実家の権力がない限り位が下げられるなり、最悪、下賜されてしまう。それが不幸かどうかは相手にもよるが、宦官に下賜されることを宮女たちは一番恐れているようだ。

猫猫は扉を軽く叩く。

「セリにおりといひ」

扉を開け無愛想な返事をするのは、部屋付の侍女だった。中では、甘ったるい匂いを漂わせた妃が酒杯を揺らしている。

宮内に入る前は誉めそやされた美しい容姿であるが、所詮、井の中の蛙だったのである。絢爛の花々に気圧され、鼻つ柱を折られ、最近は部屋の外にも出ようとしなくなつた。

（部屋の中じゃあ、だれも迎えに来てくれないよ）

猫猫は隣の部屋の洗濯籠をもひつて、また洗い場に戻つた。

仕事はまだたくさん残つている。

好きできたわけではないが、お給金はいたでいるのでその分の働きはするつもりである。

基本は真面目、それが元薬屋猫猫である。

大人しく働いていればそのうち出られる。

まさか、御手付きになることはありえないだろう。

残念なことに猫の考えは甘かったといえる。

何が起こるかわからない、それが人生というものだ。

齢十七の娘にしては達観した思考の持ち主であるが、それでも抑えられないものがあった。

好奇心と知識欲。

そして、ほんの少しの正義感。

この数日後、猫猫はある怪奇の真相を暴くことになる。

後宮で生まれる乳幼児の連續死。
先代の側室の呪いだと言われたそれは猫猫にとって怪奇でもなんでもなかつた。

2 一人の妃

「あーあ、やつぱりそなんだ」
「ええ、お医者様が入つていつたのを見たつて」

汁物をすすりながら猫猫は耳を傾ける。広い食堂には数百人の下女
が朝餉をいただいていた。内容は汁物と雑穀の粥である。

斜め前に座つている下女が噂話を続ける。気の毒そうな表情をして
いるが、それ以上に好奇心が目奥で輝いていた。

「玉葉さまのところも、梨花さまのところにも」
「うわー、一人ともなんだ。まだ、半年と三か月だけ？」
「そうそつ、やつぱり呪いのかしらね」

でてきた名前は、皇帝のお気に入りの妃たちの名前である。半年と
三か月というのはそれぞれが生んだ宮のことである。

宮内では噂話が闊歩する。それは、帝の御手付きの宮女の話やお世
継ぎについて、はたまたいじめや僻みによる悪評もあれば、うだる
暑さにふさわしい怪談めいたものもある。

「そうよね、でなければ三人も亡くなられるわけないわ」

それは、妃たちの生んだ子ども、つまり世継ぎとなられる宮たちの
ことを指していた。東宮時代に一人、皇帝になられてから一人、ど
れも乳幼児のころに見まかられている。幼子の死亡率が高いのは当
たり前であるが、殿上人の子が三人ともとなるとおかしい。

現在、玉葉妃と梨花妃の二人の子どもだけが生き残っている。

(毒殺ではなかろうか?)

白湯を含みながら猫猫は考えるがそれは違うと結論に至る。三人の子どものうち、二人は公主だったからだ。男子にのみ継承権の与えられる中で、姫君を殺す理由などほとんどない。

前に座っている一人は箸も進めず、呪いだの祟りだの言つてゐる。

(だからといって呪いはねえ)

くだらない、その一言である。呪いをかけるだけで一族郎党皆殺しとなる法まである中に猫猫の考えはむしろ異端といえる。しかし、猫猫の頭にはそれが言い切れる根拠となる知識があった。

(なんらかの病氣か? もしかして遺伝的なもの? どうこうふうに亡くなられたのだろう?)

無愛想で無口と言われた下女があしゃべりな下女たちに話しかけたのはそのときだった。

好奇心に負けて後悔するのはそれからしばらくなのである。

「くわしくは知らないけど、皆、だんだん弱つていつたってきくわ

おしゃべりな下女、小蘭シャオランは猫猫が話しかけてきたことに興味を持ったらしい、その後もことあるごとに噂話を教えてくれた。

「お医者さまの訪問回数から、梨花さまのほうが重いのかしら?」

窓の桟を絞った雑巾で拭きながら言った。

「梨花さま!」自身?

「ええ、母子ともによ」

医師が梨花妃のほうに出向くのは、病の重さとこり東宮だからであろう。玉葉妃の子は公主である。

帝の「」寵愛は玉葉妃のほうに重いが、生まれてくる子に性差があればどちらを重きに置くかは明白である。

「さすがに詳しい症状はわからないけど、頭痛とか腹痛とか、吐き気もあるっていっけ?」

小蘭は知つてることをすべて話すと満足したらしく、次の仕事に向かう。

猫猫はお礼代わりに、甘草入りの茶を渡す。中庭の隅に生えていたもので作ったのだ。薬臭いが甘味は強い。甘味を滅多に食べられない下女はとても喜んでくれた。

(頭痛に腹痛に吐き気か)

思い当る症状だったが、決定打はない。予測だけで物事を考えるのはいけないと、散々おやじびのから言われていた。

(ちじとばかし、行つてみるか)

猫猫は手早く仕事を終わらせることにした。

後宮と一括りに言つてもその規模は広大である。常時、二千人の官女に、泊まり込みの宦官は五百をこえる。

猫猫たち下女は大部屋に十人単位で詰め込まれているが、下妃は部屋持ち、中妃は棟持ち、上妃は宮持ちと大きくなり、食堂、庭園を含めれば地方都市よりもずっと広いのだ。

ゆえに、猫猫は自分の持ち場である東側を出ることはない。用事を言いつけられたときぐらいしか離れる暇はない。

(用事がなければ作ればいいだけ)

猫猫は籠を持った女官に話しかける。女官の持つている籠には、上等の縄が入つており、西側の水場で洗わねばならなかつた。水質に差があるのか、それとも洗う人間の違いか、東側で洗つとすぐに傷んでしまうのである。

猫猫は、縄の劣化は陰干しするかしないかの違いだとわかっていたが、それをいう必要はない。

「中央にいるといつものすゞく綺麗な宦官を見てみたい」

小蘭からついでに聞いた話をする、快くかわってくれた。色恋の刺激の少ないここでは、宦官ですら刺激の対象になるらしい。女官を辞めた後、宦官の妻になるという話はちらほら聞く。女色に比べればまだ健全なのだろうが、やはり首を傾げてしまう。

(やのつち自分もこいつなるのだろうか?)

己の問いかけに猫猫は腕を組んで唸つた。

足早に洗濯籠を届けると、中央に位置する赤塗の建物を見る。東のはずれよりも洗練された、手の込んだ宮殿である。

現在、後宮で一番大きな部屋に住むのは、東宮の「生母梨花妃である。帝が后を持たぬ中、男児を唯一持つ梨花妃がここに最高権力者といえる。

そんな中、見えた光景はさほど市井と変わらないものだった。

罵る女とつむく女と狼狽える女たちと仲裁する男である。

(妓楼とあまり変わらないな)

至極冷静な感想を持ち、第三者、つまり野次馬に加わる猫猫。

罵る女は後宮の最高権力者で、うつむく女はそれに次ぐ存在、狼狽えるのは侍女たちで、仲裁に入るのはすでに男でなくなつた薬師だと、周りのささやきと風貌からわかつた。

「おまえが悪いんだ。自分が娘を産んだからって、吾子を呪い殺す氣だらうー。」

美しい顔は歪むとそれは恐ろしいものになる。幽鬼のような白い肌と悪鬼のごときまなざしは、頬に手を添える美女に向けられている。

「そんなわけないとわかっているでしょう。小鈴も同じように苦しんでいるのですから」

赤い髪に翡翠の田を持つ女性は、冷静に答える。西方の血を色濃く継ぐ玉葉妃は顔を上げると医者の顔を見る。

「ですの、娘のほうの密体も見ていただきたいのです」

仲裁に入ったものの原因は医師にあるらしい。
医者が東富ばかり見て、自分の娘を見ないことに抗議をしにきたようである。

母親としてはわからぬもないが、後宮といつ仕組みから男児優先は当然である。
医師にしてみれば、いわれのないと言いたい顔であるのだが。

(馬鹿だらう、あのヤブ)

妃一人のあんなに近くにいて気づかないとは。いや、それ以前に知らないのか?

乳幼児の死亡、頭痛、腹痛、吐き気。そして、梨花妃の白い肌とおぼつかない身体。

「ぶつぶつとひとつ」とつぶやきながら、猫猫は騒動の場を後にした。

(なにか、書き物はないか)

と、考えながら。

よつて、通り過ぎる人物に田もくれなかつた。

「またやつてますね」

壬氏^{ジンシ}は端正な顔に憂いを含む。女性と見まじりのような纖細な輪郭に、切れ長の目、絹の髪を布で包んで残りを背中に流している。

宮中の花たちがこんなところで騒ぎを起こすなどはしたない、それを収めるのが彼の仕事の一つだった。

人だかりを分けようとすると、一人だけ我関せずといふ雰囲気で歩いてくるものがいる。

小柄な下女で鼻から頬にかけてそばかすが密集している。目立った風貌ではないものの、自分に目もくれずなにかひとりごとをいう姿が印象に残った。

ただ、それだけのはずだった。

東宮が身まかられたといつ話が回ってきたのは、それからひと月もしない頃であろうか。

泣きわめく梨花妃^{リハ}は、先日よりもさらにやせ細り、大輪の薔薇といわれた頃の面影はなかった。息子と同じ病に侵されていることは明白である。

あれでは、次の子を望むこともできまい。

東宮の異母姉である鈴麗公主は、一時の体調不良から状態を持ち直し、母とともに東宮を失つた帝を慰めるようになつてゐた。帝の通いようから次の子も近いかもしねない。

同じように公主と東宮は原因不明の病にかかつてゐた。一方は持ち直し、一方は倒れた。
年齢による違いであるうか、三か月の差とはいえ乳幼児の体力には大きく影響を受ける。

しかし、梨花妃はどうであろう？

公主が持ち直したのなら、梨花妃も持ち直してもいいであらう。されとも、息子を亡くした精神的なものであらうか。

壬氏は頭にぐるぐると考えをめぐらせながらも、書類にてを通して判を押していく。

なにか違いがあるとすれば玉葉妃ヨクヨウヒのほうだろうか。

「少し留守にする」

最後の判を押し終わると、壬氏は部屋を後にした。

蒸したての万頭のような頬をした公主は、赤子の無邪気な笑顔を見せる。小さな手のひらはぎゅっと拳を作り、壬氏の人差し指を掴んでいた。

「これこれ、はなしなさい」

赤毛の美女は優しく娘をおくるみに包むと、籠の中に寝かせた。

赤子は暑いとおくるみをはねのけ、来訪者のほうを見ては言葉にもならない声を機嫌よく鳴らしていた。

「なにか聞きたいことでもあるようだが」

聰明な妃は、壬氏の思惑を感じ取つてこらめいた。

「なぜ、公主殿は持ひ直されたのですか？」

单刀直入に申し上げると、玉葉妃はふつと小さな笑みをこぼすと襷から布きれを取り出した。
はさみも使わず裂いた布に、不恰好な字が書いてある。字が汚いと
いうわけではなく、草の汁を使って書いたため、にじんで読みにくくなっているのだ。

『おしづこせんべ、赤子にふれさすな』

たどたどしく書いたのもわざとであろうか？

壬氏は首を傾げる。

「おしづこですか？」

「ええ」

玉葉妃は乳母に公主を任せると、引出から何かを取り出す。
布にくるまれたそれは、陶器製の器だった。蓋を開けると、白い粉
が舞う。

「おしづこへ」

「ええ、おしづこです」

ただ白いだけの粉になにがあるのだらうとつまむ。そういえば、玉葉妃は元々肌が美しいのでおしゃれをしておらず、梨花妃は顔色が悪いのを「まかすように塗りたくっていた。

「公主は食いしん坊でして、私の乳だけでは足りず、乳母に足りない分を飲ませてもらつていたのです」

赤子を生まれてすぐなくしたもの、乳母として雇い入れたのだ。

「それは、乳母が使つていたものです。ほかのおしゃれに比べて白さが際立つと好んで使つていたものです」

「その乳母は？」

「体調が悪かつたようなので暇を出しました。退職金も十分与えたはずです」

理知的で優しくさる妃の言葉だ。

おしゃれの中には鉛白を使われているものがある。おしゃれの白さんが際立つそれは、体の中に入り中毒症状を起こす。使うものが母親ならば、胎児に影響を与え、生まれた後も授乳の際口に含むこともあるだろう。

王氏も玉葉妃もそれがどんなものかわからない、ただそれが東宮を殺した毒だということは理解できた。

「無知は罪ですね。赤子の口に入るものなら、もつと気にかけていればよかつた」

「それは私も同様です」

結果、帝の子を四人も失わせてしまった。母の胎内にいたものを加えたら、もつといふのかも知れない。

「梨花妃にも伝えましたが、私が何を言つても逆効果だつたみたいですね」

梨花妃は今も日にくまのはつた顔色の悪い肌をおしろいで塗りたくつてゐる。それが毒とも知らずに。

王氏は生成りの布きれを見る。不思議どびこかで見覚えがあるような気がする。

たどたどしい字は、筆跡を「まかすよ」に見えた。しかし、どいから女性的な文字に見えた。

「いつたい、だれがこんなものを」

「あの日、私が薬師に娘を見てもうつむいていたときです。結局、貴方の手を煩わせただけの後、窓辺に置いてありました。石楠花の枝に結んで」

では、あの騒動が原因でなにかしら氣づいたものが助言したというのだろうか。

「富中の医師にそのような遠回しなことをするかたはいらっしゃらないでしょ」

「ええ、最後まで東富の処置がわからぬよつでしたから」

あのときの騒動。

そういうえば、野次馬の中にひとりわれ関せずといつ下女がいたといふのを思い出した。

なにかをぶつぶつ言つていた。

なにを言つていた？

『なにか、書き物はないか？』

ふと、なにかが頭の中につながった。
くくくと、笑いがこぼれる。天女のような艶やかな笑みが浮かんだ。

「玉葉妃、この文の主、見つけたらどうなさ」います？」「
「それはもう、恩人ですもの。お礼をしなくてはね」「
「了解しました。これはしばらく預かってよいですか」「
「朗報を期待します」

壬氏はさわり心地のある布に記憶をたどらせた。

「寵妃の願いとあらば、必ずや見つけねばならぬな」

天女の笑みに、宝探しをする子どもの無邪気さが加わった。

4 天女の微笑（前書き）

役職とか規則とか深く考えずに読んでいただけたと助かります。

4 天女の微笑

東宮が身まかられたのを知ったのは、夕餉の際に黒い帯が配られたときだつた。

喪に服す意味合いで七日間つけるのである。

その際、食事にはただでさえ少ない肉類が全くなかつたので口をとがらすものもいた。

端女の食事は一日一回、雑穀と汁物、時折、菜が一品振舞われる程度である。やせぎすの猫猫^{マオマオ}には十分な量であるが、足りないとと思うものがほとんどだらう。

下女と一括りにいつてもいろんなものがいる。

農民出身のものもいれば、町娘もあり、数は少ないものの官の娘もいた。親が官であればいくらか待遇はいいはずだが、それでも下働きの理由となると本人の素養の問題である。文字の読み書きもできないものを部屋持ちの妃にできるわけがない。妃といふのは、職業である。

(結局、意味なかつたのか?)

猫猫は東宮の病の原因を知つていた。

梨花妃^{リファ}と侍女たちは真っ白なおしろいをふんだんに使つていた。庶民には手を出せない高級品だ。

それは妓楼の高級遊女たちも使つていた。一晩で農民一生分の銀を稼ぐ妓女もいる、自分で買つものもいれば、貢物としてもうつものもいた。

顔から首にかけて真っ白にはたかれるそれは、妓女の身体を蝕み、幾人かを死に至らしめた。

おやじが「やめろ」といつても使い続けたからだ。

やせ細り、衰弱して死んでいく妓女を猫猫はおやじのそばで幾人も見てきた。

命と美貌を天秤にかけ、結局どちらも失ったのだ。

だから手短な枝を折り、簡単な文を書いて二人の妃の元に置いた。まあ、紙も筆も調達できない端女の書いた警告を信じるとは思えなかつたが。

喪が明けて、だれも黒い帯が見かけられなくなつた頃、玉葉妃の噂ギョクヨウを聞いた。東宮を失い、傷心の帝は、生き残つた公主を慈しんでいるらしい。

同じくわが子を失つた梨花妃のもとに通う話は聞こえない。

(都合のこと)

猫猫は魚のかけらがほんの少し入つた汁を飲み干すと、食器を片づけて仕事場に向かつた。

「呼び出し、ですか？」

洗濯籠を抱えた猫猫は宦官に呼び止められた。
中央にある宦官長の部屋に来いとのこと。

宦官とは、後宮を大きく分ける三部門の一つであり、下位に位置する女官のことをいう。他の二つ、部屋持ちの妃たちは内官、宦官は内侍省にあたる。

(なんの用だらう?)

宦官は周りの下女にも話しかけてくる。どちらから自分だけではないらしい。

きっと人出が足りないのだらう。

猫猫は籠を部屋の前に置くと、宦官の後について行った。

宮内長の棟は後宮と外部をつなぐ五門のうち、ひとつのがある。帝が後宮に訪れる際、こここの門を必ず通る。

呼び出されたとはいえ、あまり居心地のいい場所ではなかつた。ようは頭が高いというものである。

隣の内宮長の棟に比べ幾分劣るもの、中級妃の棟よりも豪奢な造りである。欄干の一つ一つに彫り物が施されており、朱の柱には鮮やかな龍が巻き付いている。

促されるまま部屋の中に入ると、大きな机がひとつあるだけで存外殺風景であった。中には猫猫たち以外の下女が十人ほど集まつており、不安となにかしらの期待とそしてどこか興奮したような表情を浮かべている。

「はい、ここまで。おまえらは帰つていいぞ」

(あれ?)

なぜだか不自然に区切られてしまった。猫猫のみ部屋に入り、残りの下女はいぶかしげに帰つていいく。

定員といつには部屋はまだ広いようであるが。

猫猫は首を傾げなら、周りを見ると女官たちの視線が一つに集まつていることに気付く。

部屋の隅に田立たぬように座る女性と、それに仕える女官、少し離れて年嵩のいつた女性がいる。中年の女性は富面長であると記憶しているが、それよりも偉そうな女性は何なのだらう。

(むむ?)

女性にしては肩幅が広く、簡素な服を着ている。髪を巾でまとめ、残りを下ろしている。

(男なのか?)

天女のよつな柔らかい笑みを浮かべ女官たちを見ている。隣に控える宦官すら赤くなっている。

なるほど、眞が頬を染めるわけがわかる。

噂に聞いていたものすゞしく美しい宦官といつのはこの男のことだらうと猫猫は思った。

絹糸のような髪、流れるような輪郭、切れ長の目と柳のよつな眉を持つた絵巻物の天女もこれほど美しくはあるまい。

(もつたいないなあ)

顔を染める」となく思つたのがそんな言葉である。大切なものがなくなつてしまつたので、子を成せないわけだ。あの男の子どもであれば、どれほど鑑賞に優れたものが生まれよう。

しかし、あれだけ人間離れした美貌があれば、皇帝も籠絡することもできるだろうと、不遜なことを考えていると、男は流れるような動きで立ち上がつた。

机に向かい、筆をとると優美な動きでなにかをむりむりと書く。

ひとつと甘露のような笑みを浮かべ、男は書き物を見せた。

猫猫は固まつた。

『そこそこのそばかすの女、おまえは居残りだ』

要約すれば「こんなことを書かれていた。

猫猫の動きを見逃さなかつたのだから。満面の笑みが浮かんでいた。

男は書き物をしまつと、手のひらを二回叩いた。

「今日はこれで解散だ。部屋に戻つていいぞ」

下女たちはいぶかしみながら、後ろ髪ひかれながらも部屋を出る。先ほどの書き物が何の意味を示しているのかわからないまま。

部屋を出る下女たちが皆小柄で、そばかすの目立つ容貌をしていることに猫猫は気が付いた。しかし、書き物を見ても何の反応も示さなかつたのは読めなかつたのだろう。

あの書き物は猫猫を指していたものではなかつた。

他の下女とともに部屋を出ようとすると、がっしりと手のひらが肩に食い込んでいた。

恐る恐る振り向くと、まぶしくて目がつぶれるような天女の笑みがあつた。

「だめじゃないか。君は居残りだよね」

いつまでもなく有無を言わせなかつた。

「不思議だよねえ、話に聞くと君は文字が読めないってことになつてるんだけど」

「はい、卑賤の生まれでござりますので。なにかの間違えでござるこましょい」

（面倒なので報告しませんでした）

とは、口が裂けても言わない。
しづらぱつくれる気満々である。

文字が読める、読めないで下女の扱いはそれぞれ違う。読めるほう
が読めるほうで、読めないほうは読めないほうで役に立つのである
が、無知なふりをしていたほうが世の中立ち回り安いのである。

美しい宦官は王氏^{シンシ}と名乗つた。

虫も殺さないような優美な笑みなのに、なにやら蠢くものを感じる。
でなければ、こうして猫^{マオマオ}を窮地に立てることはできない。
王氏は黙つてついてここといった。
首を横に振れば、軽く首がどぶ使い捨ての端女は素直についていく
しかなく、なにがこれから起るのか、それをどううまく対処する
のか思いをめぐらせていた。

こうして王氏に連れて行かれる理由に思ひ当らないわけではなかつたが、どうしてそれがばれたのか不思議だった。

妃に文を送ったこと。

わざとらしく壬氏の手には、布きれがあった。それには、汚いたどたどしい文字が書かれていることであろう。

字が書けることは誰にも黙っていたし、薬屋をしていて毒物に詳しことも黙っている。いつまでもなく、筆跡でばれるのではない。周りを確認して置いてきたはずだが、誰かに見られていたところどうか。

小柄でそばかすのある下女に田安をつけたのだ。まず、先に文字が書けるものを集め、筆跡を集めただけではない。字といつものは崩して書いてもくせが残るものである。

その中に適合者がいないとなると、次は文字を書けないものを集める。

読める、読めないの判断は先ほどの通りである。

(なんて疑い深いんだ。ってか暇人すぎるだろ)

悪態をついてこるうちに田的^{ギョクコウ}地に到着した。
案の定、玉葉妃の住まいであった。

壬氏が扉を叩くと、凛とした声が短く「どうぞ」といった。

中に入ると赤い髪の美女が柔らかい巻き毛の赤子を愛おしそうに抱いていた。

赤子の頬は薔薇色で、母親譲りの色素の薄い肌をしてくる。健康そのもので、半開きの口から可愛らしい寝息が聞こえる。

「かのものを連れてまいりました」

「お手数をかけました」

先ほどの崩れた口調ではない。
分をわきまえた言動である。

玉葉妃は壬氏とはまた違つた温かい笑みを浮かべると、猫猫に頭を
下げた。

猫猫は驚いて目を見開く。

「そのよつな」とをされた身分ではござませぬ」

失礼のないよつて、言葉を選びながら述べる。

「いいえ。私の感謝はこれだけではありません。やや子の恩人です
もの」「なにか勘違いなされていいるだけです。きっと人違いではあります
んか」

冷や汗をかく。

丁寧に言ったところで否定といつて変わりない。
首ははねられたくないが、関わり合いにもなりたくない。長いもの
に巻かれたくないのである。

玉葉妃が少し困った顔をしたのに気付いた壬氏は、ぴらぴらと布き
れを見せつける。

「これは下女の仕事着に使われる布だつて知っていますか?」
「やういえば、似ていますね」

あくまでしらばっくれる。
無意味だとわかつても。

「ええ、尚服に携わる下女用のものですね」

宮富は六つの尚に分けられる。衣服に携わるのが尚服で、洗濯係を主とする猫猫はそこに分けられる。

生成りの裳は、壬氏の持つてている布と同じ色をしている。
裳の内側、ひだでうまく隠れている部分に、奇妙な縫い目があることでも調べればわかることだらう。
つまり、証拠はその場にあるということだ。

壬氏が玉葉妃の前で無礼な真似をするとは思わないが、しないとも限らない。

覚悟を決めるしかなかつた。

「私は何をすればよろしいのでしょうか？」

二人は顔を見合せると、肯定の意味でとらえた。
どちらも、田がつぶれるほど優しい笑みを浮かべる。

安らかな赤子の寝息が聞こえる中で、猫猫は消え去りそうな小さなため息をついた。

猫猫は翌日から、ほとんど何もない荷物をまとめなくてはならなかつた。

小蘭シャオランや同部屋ドウブヤのものは皆つらがしあつてゐる。

どうして、そなつたのか追及してくる。

猫猫は乾いた笑みを浮かべはぐらかすしかなかつた。

猫猫は、皇帝の寵妃の侍女となつた。

まあ、いわゆる出世デスである。

部屋付の富女、しかも帝の寵妃の侍女ともなれば、待遇は高くなる。今まで金字塔の底辺にいた高位は真ん中くらいまで上がっている。説明によると、給金も跳ね上がっているらしいが、その二割は売りとばした農民のもとに手数料として渡されるのでおもしろくなかった。

今までのたこ部屋でなく、狭いながら一室を与えられた。

菰を重ねて敷布をかけただけの布団から、寝台つきに階級が上がった。寝台二つ分の広さしかない部屋であるが、朝同僚の身体を踏まず起きることができるには正直うれしかった。

うれしい理由はもう一つあるのだが、これは後程語ることになろう。

玉葉妃キヨクヨウヒの住まう翡翠宮には、猫猫マオマオ以外に四人の侍女がついている。公主リファが離乳食を取り始めたので、乳母を新たに雇うことはなかつた。梨花妃リハヒが十人以上つけているのに比べると、随分数が少ない。

正直、最下層の小間使いだったのがいきなり同僚になりましたといわれて侍女たちは難色を見せたのだが、猫猫が思うような嫌がらせはなかつた。

むしろ、同情的な目で見られていた。

(なぜに?)

その理由はすぐにわかつた。

薬膳をふんだんに使つた宫廷料理が皿の前にある。

玉葉妃の侍女頭である紅娘は、菜を一つずつ小皿に盛ると猫猫の前に置いた。

すまなそうに玉葉妃がこちらを見ているが、止める様子はない。

残り三人の侍女たちは、哀れな顔でこちらを見ている。

毒見役どころのものである。

東富のことでも、神経質になつてゐる。

公主が病になつたのもどこからか毒が紛れ込んでいたのではないか
という噂が回っていたからだ。毒の元を知らされていない侍女たち
は、何に紛れ込んでいるかわからない毒を恐れていたに違いない。

そこで、毒見役専門に下女が送られてきたのなら、使い捨ての駒と
してみてもおかしくない。

玉葉妃だけでなく、公主の離乳食、皇帝訪問の折の滋養料理も毒見
のつちに含まれる。

玉葉妃の懷妊がわかつた頃、一回ほど毒が盛られていることがあつ
た。一人は軽いものですから、もう一人は神経をやられて手足が
動けなくなつてゐる。

今まで恐る恐る毒見役をやつてきた侍女たちは、正直、感謝をして
いることだらう。

猫猫は盛られた皿を見ると眉を寄せた。陶器製の皿だ。

(毒が怖いなら銀にするのは基本でしょ)

箸でつまむとなますの具をじっくり見る。
匂いを嗅ぐ。

舌の上にのせて、しひれがないのを確かめるとゆきくり嚥下した。

(正直、毒見に向かないのだが)

即効性の毒ならともかく、遅行性の毒であれば猫猫に毒見を頼んで
も意味がないのである。

実験と称し、少しずつ毒に慣らした身体を作ってきた猫猫は、おそれ
らく大抵の毒は効かなくなっていることだろう。

これは、薬屋の仕事としてではなく、猫猫の知的欲求を満たすため
の行為である。時代と場所が違えばきっとこいつ呼ばれていることだ
ろう、『狂科学者』と。

薬師の技術を教えてくれたおやじどのですら、呆れているほどだつ
た。

身体の変化ではなく、自分の知識の中であれらしい毒はないと確認
すると、よしやく玉葉妃の食事が始まる。

次は、味気ない離乳食の番だつた。

「皿は銀製のものに替えたほうがよろしくと思います」

感情をこめることなく上司の紅娘に伝えた。

一日の活動報告として、紅娘の部屋に呼び出されたのだ。部屋は
広いが華美な装飾はなく、実用的な彼女の柄を表しているようであ
る。

三十路を前にした黒髪の美しい侍女頭は溜息をつく。

「ほんと、壬氏さまのこゝたとおりね」

呆れた顔で、わざと銀食器を使わなかつたことを告白した。
壬氏の指示だつた。

猫猫は無愛想な顔がさらに機嫌悪くなるのをじらえながら紅娘の話を聞く。

「あなたがどういう理由で、その知識を隠していたかしらないけど、まさに毒にも薬にもなる能力ね。字が書けることも言つていれば、お給金はもつとももらえたはずだけ」

「薬屋の真似事を生業にしていたからです。かどわかされて連れてこられたのに、人さらいどもに今も給金の一部が送られていると考えると腸が煮えくり返ります」

「つまり、自分の給料が減つてでも、そいつらに酒代を『ね』てなるものかとこことね」

賢い女官は猫猫の動機を理解してくれたらしく。

「無能なら一年の奉公でこゝらでも替えがきくものだしね」

ついでに理解しなくていいところまで、察してくれた。

紅娘は卓子のある水差しを取ると、猫猫に持たせた。

「これか……」

猫猫がたずねる間もなく、彼女の手首に痛みが走った。衝撃で持たされた水差しが床に落ちる。陶器製のそれに大きなひびが入る。

「あら、これって結構高いのよ。下女程度のお給金じゃあ、払えないくらいにね。これじゃあ、実家への仕送りもできないわね。むしろ請求するくらいじゃないと」

猫猫は紅娘がいわんとしていることがわかつたらしく、無表情の中に皮肉めいた笑みを浮かべていた。

「もうしわけありません。毎月、仕送る分から差し引いてください。足りなければ、私の手持ちのほうからもお願ひします」

「ええ、富官長のところへ手続きしておくから。それと」

紅娘は落ちた水差しを卓子の上に置き、引出から木簡を取り出した。それをひらりと筆を滑りせる。

「これは、毒見役の追加給金の明細よ。危険手当とこうじてゐる。気になる点があれば言つてちょうだい」

金額は、猫猫の現在の給料とほぼ同額だった。手数料でとられる分がないだけ、猫猫は得したことになる。

(館の使い方がうまいことで)

猫猫は深く頭を下げると部屋をあとにした。

元々いた四人の侍女たちはたいへん働き者であった。

広さはそれほどないものの、翡翠宮はほぼ四人で回っている。尚寝、つまり部屋掃除専門の下女も来るのだが、寝所はもとより内部の掃除はすべて四人の侍女たちで終わらせる。

新参者の猫猫^{マオマオ}の仕事は「飯を食べることくらいしかないわけだ。

一番嫌な仕事を押し付けたことに罪悪感を持つているのか、それとも自分の領域を荒らされたくないのか、紅娘以外の侍女は誰も猫猫に仕事を押し付けることはなかった。むしろ、手伝おうとするのを「いいのよ」とやんわりと断つて、部屋に押し込めていた。

(落ち着かない)

小部屋に押し込まれて、呼ばれるのは一回の食事と毎の茶会、そして数日に一度訪れる帝の滋養強壮料理を食べることくらいである。たまに、紅娘が気をきかせて用事を頼むのだがすぐに終わる簡単な仕事だけである。

(なにこれ、食っちゃ寝だろ)

毒見に加えて、食事も以前より豪華になつた。茶会には甘い菓子があり、余れば猫猫にも配られる。

蟻のように働くことがなくなつたので、栄養はそのまま肉になつていった。

(家畜にでもなつた気分だ)

毒見役をやるにあたり、猫猫に不適な点はひとつある。

猫猫はもとから瘦せているので、毒にあたって痩せたとしてもわりにくいかからだ。

それに致死量は体の大きさに比例する。太ればそれだけ生き残る可能性が高くなる。

猫猫としては痩せるほどの毒がわからないわけではなく、致死量をこえて生き残る自信があるので周りはそうでないらしい。小柄でやせぎすな猫猫は幼く見えるらしい、可哀そうな使い捨ての駒に三人の侍女たちは同情していた。

お腹いっぱいでも粥はおかわりをつがれ、菜の具は他のものよりも多い。

(妓楼の小姐たちを思い出す)
(ねえちゃん)

無愛想で無口で可愛げのない生き物であるはずが、なぜか遊女たちに可愛がられていた。ことあるごとに、菓子を持たされ、飯を食わされた。

ちなみに猫猫は気づいていないようであるが、可愛がられる理由はあつた。

猫猫の左腕には無数の傷がある。

切り傷、刺し傷、火傷の痕に針のようなものが刺された痕。

小柄でやせぎすで腕には無数の傷。

よく腕から包帯が巻かれ、たまに青白い顔で往来で倒れることもあつた。

無愛想で無口なのも彼女が今まで受けっていた仕打ちの結果だと皆が涙を飲んだ。

皆、虐待を受けているものだと思っていたが、眞実は違う。

全部、猫猫本人がやつたことだ。

傷薬や化膿止めの効能を調べ、毒を少しづつ飲み耐性をつけ、時に自分から毒蛇を噛ませることもあった。たまに量を間違えて、倒れることもあった。

ゆえに傷は利き腕でない左にのみ集中している。

別に痛みが好きという被虐的な趣味はかけらもないが、知的欲求が薬と毒物に傾きすぎている点でいくつ普通の娘とはかけ離れていた。

そんな娘を持つて迷惑きわまりないのがおやじびのである。

花街に暮らす自分の娘が遊女以外の道を進めるようにと、薬の知識と文字を教えたというのに、いつのまにいわれなき誹謗中傷を受けようになつた。

一部のものは理解していたが、多くのものはおやじびのこ冷たい眼を向けていた。

年頃の娘が、実験と称し自傷行為を繰り返すなど思いもしない。

などというわけで、親に虐待された拳句、後宮に売りとばされ、使い捨ての毒見にさせられた哀れな娘と皆に思われている。

(このままでは豚になる)

そんなことを考えるよひになつた頃、猫猫の前に嫌な訪問者が現れるのであつた。

人間離れした美貌を持つ青年は、天上人の笑みをたやすく浮かべていた。

三人の侍女は頬を染めながら客人を迎える茶を用意する。壁の向こうから小競り合いが聞こえるといふをみると、だれが準備するのか言い争っているらしい。

呆れた紅娘^{ホンニヤン}は自ら茶器を用意すると、三人に部屋に戻るように指示した。

毒見役の猫猫は銀の茶椀を持つと匂いを嗅いで口に含んだ。

さつきから壬氏^{ジンシ}がずっとこっちを見ているので居たたまれない。目線を合わせないように田を細める。

若い娘であれば、たとえ宦官であるうともこれだけの美丈夫に見つめられて悪い気はしないはずだが猫猫はそうではない。興味が他人のそれよりもずれたところにあるため、壬氏が天女のようく美しいと理解していくても、一線を引いてみている。

「これは貰いものなんだが、味見してくれないか？」

籠の中に、包子が入っており猫猫はつまんで中を割つてみる。餡にひき肉と野菜が詰まっている。

匂いを嗅ぐとどこかで嗅いだことのある薬草の匂いがした。

「昨日食べた強壮剤と同じものだ。

「催淫剤入りですね」

「食べなくてもわかるんだ」

「健康には害はありませんので、お持ち帰りください。美味しいいただいてください」

「いや、貰つた相手を考えると素直に食べれないもんだろ」

「ええ、今晚あたり訪問があるかもしませんね」

淡々と述べる猫猫に、想像したものと当てが外れた壬氏はなんともいえない顔をしている。知つていて催淫剤入りの饅頭を食べさせようとしたのだ、毛虫を見るような目で見ないだけましなのである。ところどころからちらついたものであろう。

一人のやり取りに、玉葉妃は鈴の鳴るような声で笑う。足元には寝息を立てる小鈴公主がいる。

猫猫は一礼すると密間をあとじよりよつとする。

「ちょっと、待った」

「なにか御用でしようか?」

壬氏は玉葉妃エヨクヒと田を合わせ、一人は頷いている。どうやら、猫猫が来る前に本題は伝えられてこりよつだ。

「媚薬を作つてくれないか?」

一瞬、猫猫の瞳に驚きと好奇の田が浮かんだ。

その薬をどう使うのかは知らないが、それを作る過程は猫猫にとって至福の時に違ひなかつた。

唇が笑みを作るのを押さえつつ、猫猫はこいつ述べた。

「時間と材料と道具。それがあれば」

媚薬に準ずるものなら作れます、と。

どうしたものか。

柳の眉に憂いをひそめ、腕を組んでいる。
性別さえ違えば傾国となるといわれた壬氏であるが、本人がその気
であれば性別など意味がないものといえる。

今日もまた後宮の中級妃ひとり、下級妃ふたり、殿中でも武官と文
官ひとりずつに声をかけられた。武官には強壮剤入りの点心までい
ただいたので、今日は夜勤を行つことなく宮中の自室に戻つてはいる。
自衛のためであり、さぼりではない。

机の上にある巻物にわらうと前を書く。

今日声をかけてきた妃たちの名前である。帝の御通りがないからと
いつて、違う男を寝所に引き入れようなど甚だしい。正式な報告で
はないものの、今後、沙汰が下ることであろう。

自分の美貌が女官たちの試金石だということを籠の小鳥たちは幾人
わかっているだろうか。

妃の位は、まず両親の家柄に加え、美しさ、賢さを基準に選ばれる。
家柄、美貌に比べ、賢さというのは難しい。国母となるにふさわし
い教養を持ち、それに加えた貞操観念も持ち合わせねばならない。

意地の悪い我が皇帝は、選出基準に壬氏を用いた。

玉葉妃と梨花妃を薦めたのも壬氏である。玉葉妃は思慮深く謙虚で
あらせられ、梨花妃は感情的な性格があるものの誰よりも上に立つ

ギョクヨウヒ
リハ

にふさわしい気質を持っている。

どちらも皇帝に対する忠誠を持ち、邪まな感情は見当たらなかつた。梨花妃に至つては心醉の域に達していた。

吾主ながらひどいかたである。

自分に国に都合のよい妃を揃えさせ、子を産ませ、その能力がないとあらば切り捨てる。

今後、寵愛は玉葉妃に傾き続けるであろう。幽鬼のようにやせ細つた梨花妃の元に通つたのは、東宮が身まかれたときが最後だつた。

梨花妃以外にも必要なくなつた妃は幾人もいる。それらは、折をみて実家に帰され、また下賜される。

重ねられた書類を一枚引き抜いた。
位は正四品、中級妃にあたる。名を芙蓉フヨウといつた。

先日、異民族を撃退した勳功としてとある武官に下賜されることになつた妃である。

「さてさて、上手くいくことでしょうか？」

己の頭の設計通りに事を運べば、問題はないはずである。それには、無愛想な薬師どの協力がいくらか占めている。

自分を欲情の相手としない人間は皆無ではないが、毛虫の「」とく見られたのは初めてである。

本人は上手く隠したつもりだろうが、表情につつすら浮かんだ侮蔑の目は隠しきれていない。

思わず笑いがこみ上げる。天上から落ちる甘露のよつた笑みに少し
だけ底意地の悪さをまじえて。

別に被虐嗜好はないのだが、妙に面白かった。

「今後、どうなることやら」

壬氏は書類を硯の下に置くと、眠りにつくことにした。

夜中、訪問者が来ても問題ないよう、施錠はしっかりとかけて。

万能薬という言葉はあるが、実際万能である薬は存在しない。
おやじどの言葉に反感を持っていた頃が猫猫マオマオにもあった。

どんな病にも、どんな人間にも効く薬を作りたい。そんなわけで、
他人が目を背けたくなる傷を作り、新しい薬を開発してきたのであ
るが万能である薬はいまのところ完成の日途はない。

大変気に食わないことであるが、壬氏の持ってきた話は猫猫の興味
を持たせるに十分であった。

後宮に入つてからと/orもの、甘茶くらいしか作れなかつたのだ。
材料になる薬草は驚くくらい後宮内に生えていたのだが、道具もな
く、大部屋で怪しげな行為もできずに我慢してきたのだ。

材料の調達にとでかけるが表向きの理由として洗濯籠を背負う。紅
娘の計らいで、今後洗濯係は猫猫マオマオになろう。

洗濯ものを届けに来たふりをして、前もつていわれていた医務室に

入る。中には、以前狼狽えるしかなかつたあの医者と、王氏によくついている宦官がいた。

医師は薄いひげのよつなひげを触れながら、值踏みするような目で猫猫を見る。

なぜこんな小娘が自分の領域を荒らすのだと言わんばかりだつた。

(醜女しうめをあまりじろじろみないでくださいませ)

医者に比べて宦官は主に接するように寧な動きで猫猫を案内する。

三方を薬棚で囲い込まれた部屋に入れられたとき、猫猫は後面にきて一番の笑みを浮かべていた。頬は赤く染まり、眼はつるみ、一字字だつた唇が柔らかい弧を描いている。

宦官が驚いた表情で猫猫を見るが、そんなの関係なかつた。

引出の見出しを眺め、珍しい薬を見つけるなり踊るよつな奇妙な動きをする。喜びがあふれ出て、頭の中で納まりきれなかつた。

「なんかの呪いか、なにかか?」

少一時間そんなことを繰り返したところだつた。

いつのまにか現れた王氏が奇異の目で猫猫を見ていた。

引出の端から順につかえそうな材料を集め、それを薬包紙に包み、筆で名前を書く。まだ木簡が書物として使われる中で、ふんだんに紙を使うことは贅沢である。

どうひげの医師は、何者だとぞつてくるので、宦官は戸を開

めた。面倒の如前ガオシヨンは高顧カオシヨンとこつりしこ。

引出ハチウが高ことじるにあるのは、高顧カオシヨンがとつててくれる。その上向アシマツせなにもしない、しないならじこかこけよ、と無表情の奥に猫猫ネコネコは思つ。

引出ハチウ一番上に、猫猫ネコネコは見覚えのある名前メイモンをみつけて身を乗り出した。

高顧カオシヨンに手渡されたそれをみると、なんともこえない表情をする。

何かの種子ヒメノシが手のひらにねまつている。

「これだけじゃあ、足りない」

「ならば、用意すればいいだけの」とだ

無駄に笑顔を振りまいてみていただけの美丈夫メイジリョウは簡単に言つてくれる。

「西の、ついに西の南方にあるものですよ

「交易品を探せば見つかるだらう」

王氏ウエイシは種子ヒメノシを一つつまむ。杏エドに似た形をしたそれは、独特の匂においを発していた。

「これはなんどこつんだ?」

青年の質問に猫猫ネコネコは答える。

「可カ可カオ? です」

と。

9 可可？（前書き）

玉露で酔つぱらう人たちがいた頃の話です。

9 可可？

「お前の腕が想像以上のものだということがわかつた」

壬氏ジンシは呆れた声で猫猫にいった。

「私もここまでとは思いませんでした」

目の前の惨状になかば放心していた。

「ああ、そうだな」

いつもの無駄に輝いた笑みはない。
ただただ疲れた顔をしている。

「どうしてこうなったんだ」

それは、数時間前にさかのぼる。

届けられた可可カカオ？は、種子のままではなく粉末になったものだった。
他に材料として猫猫マオマオが頼んだものはすべて翡翠宮の台所に運び込まれている。

三人の侍女たちは野次馬根性で眺めていたが、紅娘ホンニヤンが注意するとそれぞれ元の持ち場に帰つて行つた。

牛乳、乳酪バター、砂糖、はちみつ、蒸留酒に乾燥した果実、匂い付けの

香草油。どれも栄養価の高い高級品であり、同時に強壮剤として利用されるものである。

猫猫は一度だけ可可^{カカオ}?を食べたことがあった。粉を練つて砂糖を混ぜ固めたもの、巧克力とくれた遊女は言った。

指先ほどのかけらだつたが、食べるときつめの蒸留酒を飲み干した気分になつた。妙に気持ちが明るくなつた。

邪な客が売れつ子妓女の関心をかうために珍しい菓子だといつて渡したものである。残念なことに、様子の違う猫猫を見て、妓女は怒り、やり手婆に入り禁止を食らう羽田になつたといつ。

その後、種子をいくつか手に入れることはあつたが、それを薬として扱うことにはなかつた。

花街の薬屋にそんな高級品を求める密はいなかつたのだ。

記憶の中の巧克力は油脂で固めたものだと残つてゐる。薬や毒物の匂い、味を完璧に覚えている猫猫は、食材に関して鮮明な記憶を持つてゐる。

まだ暑い季節であり、乳酪でうまく固められるとは思えないのに、果実を包み込むことにした。氷があれば完璧なのだが、さすがにそれは無理だらうと材料の中に入れなかつた。

代わりに大きな素焼きの水瓶を用意する。水が半分ほどはつてある。水の蒸発により内部は外気より幾分涼しく、ざりざり油脂が固まる温度だらう。

猫猫はかき混ぜたそれを匙ですくい、口に含む。

苦味と甘味と他に気持ちを高揚させる成分が舌を通じて感じる。

昔に比べて、酒にも毒にも強くなつた猫猫は、以前ほど高揚した気分にならなかつたが、それでも効き目が強いと感じられた。

(もう少し小さくつくりたほうがいいかな)

果実をさうに半分に切り、褐色の液体に浸す。
皿のせ、中空に浮かすよつて壺の中にしまつ。

蓋をかぶせ、菰で隠すとあとは固まるのを待つだけである。
壬氏^{ジンシ}が試作品を取りに来るのは夕刻のことだ、それまでに固まつて
いるだらう。

(少し余つたなあ)

褐色の液体はまだ残つている。材料はとても高級品だし、栄養価も
高い。媚薬といつても、猫猫にはそれほど効くものでもないので、
後で食べることにした。麺麪を立方体に切り、しみこませる。これ
ならば、冷やす必要もなさそうだ。

蓋をし、棚に置く。

残つた材料はまとめて自室に置き、洗い物をするために外の水場に
向かつた。

このとき、切り分けた麺麪も自室に運び込むべきだが、頭の中
からはずれていた。味見で少し高揚していたせいかもしれない。

まあ、後の祭りである。

その後、紅娘に用事を頼まれたり、ついでに外に生えている薬草を摘みにいつたりしている間に事は起きていた。

洗濯籠に薬草を抱えてほくほくしている中、真っ青な顔をした紅娘と、憂いを含んだ玉葉妃^{エヨウヒ}が待っていた。高順^{ガオシュン}もいることから、壬氏^{ミナハシ}も来ているのだろう。

額を押さえる紅娘が台所をさしてゐるのを見て、猫猫は籠を高順に押し付け現場へと向かつた。

呆れ顔の壬氏がこちらを見る。

仲良く抱き合つように眠る三人の侍女たちがいた。胸元ははだけ、裳はふくらはぎまでめぐれていた。皆が皆、幸福そうな顔で頬は紅潮している。

事前とか事後とか、不遜な言葉が頭をよぎつたが、考えないようになした。

むしろ考えたくなかつた。

卓の上には、褐色の麺麪があつた。
数は三つ足りなかつた。

紅娘と高順と猫猫で侍女たちをそれぞれの部屋に寝かせると、疲れがどつときた。

居間では玉葉妃と壬氏が物珍しそうに巧克力麺麪^{チョコパン}を眺めている。

「これが、例の媚薬なの？」

「いいえ、それはこちらの『まつです』」

猫猫は果実を包んだものを差し出した。親指の爪ほどの粒が二十ほど並んでいる。

「じゃあ、こいつは何なんだ？」

「私の夜食です」

言葉を間違つたらしく、明らかに周りが引いてくる。高順や紅娘も異物を見る目をしていた。

「酒や刺激物に慣れていると、効き目はそれほどありません」

実験に使つた毒蛇を酒に漬けて飲んでいたので、猫猫は酒豪だった。酒は薬の一つだと猫猫には分類される。

しげしげと、麺麪をつまんで見る王氏。

「では、私が食べても問題ないのかな

『それはおやめください！』

紅娘と高順の声が重なった。高順の声を初めて聞いた気がする。王氏は冗談だよ、と麺麪を皿に置いた。

たしかに、皇帝の寵妃の前で媚薬を口にするのは不遜であるが、それ以上に間違つても天女の美貌が頬を染めながら迫ってきたら誰しも理性のたがが外れかねないためであろう。

「今度、帝のために作つてもらおうかしら。まんねりを防ぐために

「も

「こつもの強壮剤の三倍は効くと思こますナビ

「三倍……」

持続のほつかしら、と玉葉妃の小声は聞こえなかつたことである。
さすがにきついらし。

媚薬を蓋付きの容器に移し替え、壬氏に渡す。

「効き目が強いので、一粒ずつを用安にお願いします。食べ過れる
と血が回り過ぎて、鼻血が出ると思こますので。また、意中の相手
と一緒に元気のときご使用してください」

注意事項を終えると壬氏は立ち上がる。

帰り支度をするため、高順と紅娘は部屋を出る。

玉葉妃も一礼すると、籠の中で眠る公主とともに部屋を後にしてした。

猫猫は麺麪の皿を片付けようとするが、後ろから甘い匂いがした。

「思った以上のものを作ってくれてあつがどう

甘いはちみつのような声が聞こえる。

髪をすべい上げられ、首になにか冷たいものが当たつていた。

振り返ると、片手を振りながら壬氏が部屋を出していく。

「なるほど

皿に皿を落とすと、麺麪の数が一つ足りない。

犯人の目安はついている。

「被害者がでなければいいけど」

他人事のように猫猫は呟いた。

夜はまだ長い。

寵妃、玉葉に仕える侍女が一人、桜花は、今日も誠心誠意をこめて仕事に従事していた。

先日、仕事中に居眠りをしてしまうといつ失態を犯したが、主である玉葉妃は咎めもしなかった。ならば身を以つて仕えるしかあるまいと、窓の棊から欄干の一本一本まで丁寧に掃除する。

台所の茶器を整理しようとした中に入ると、新人侍女がなにやら作っていた。名前を猫猫マオマオというが、滅多に自分から口を聞かないので、どんな人間なのかよくわからない。

ただ、腕に虐待を受けた痕があり、身売りされたこと、そして現在、毒見専門で雇い入れられたことを聞くといったまれなくなつた。

痩せた身体を太らせようと食事を増やしたり、傷痕をむりすのは可哀そしだと掃除をさせなかつたり。残り二人の侍女も同じ考えらしく、結果、猫猫の仕事がほとんどなかつた。

侍女頭の紅娘はそれではあんまりだと、洗濯を猫猫の仕事に与えた。洗濯は籠を運ぶだけなので、腕の傷は目立たない。他にもこまごまとした用を頼んでいるらしい。

「なにを作つているの？」

鍋で草のよつなるものをゆでている。

「風邪薬です。」

必要最低限の言葉を述べるのみだ。きっと、虐待の後遺症でひととの付き合いがうまくいかないかもしれないとおもつと涙を誘う。

薬に造詣が深いといつ話で、時折、こうやって作っている。片付けはきれいにしてくれるし、この間もらったあかぎれの薬は重宝しているので桜花は何もいつことはない。薬づくりは、たまに、紅娘からも頼まれてやつてこらみづである。

銀の茶器を取り出すと乾いた布で丁寧に磨く。

猫猫が口を開くのはほとんどないが、眞い具合に相槌を打ってくれるので、話しがいがある。最近噂になつていて怪奇話をした。

中空を舞う、白い女の噂だった。

猫猫は、作り終えた風邪薬と洗濯籠を持ち、医局に向かつ。一応、形だけでも医師の判断を委ねるためだ。

(二二) 一か月位の出来事か?)

ありきたりな怪奇話に猫猫は首を傾げる。

まだ、こちらに来る前には聞いたことのない噂だった。噂という噂は小蘭が持つてきてくれていたので、ここ最近にできた話だとわかる。

後宮はぐるりと城壁に囲まれている。四方と中央の門以外出入りができる、堀の向こうには深い堀が通つており、脱走も侵入も不可能である。

深い堀の下には後宮から抜け出そうとした妃が今も沈んでいるなど
言われている。

(城門付近かあ)

近くに建物はなく、松林が広がっていたはずだ。

(夏の終わりからだつたよな)

この時期はあるものの収穫期である。

よからぬことを頭に浮かべていると、狙こすましたかのように嫌な
声が聞こえた。

「お仕事じき苦勞様」

牡丹のような絢爛な笑みに、猫猫は無表情をはりつけたままだった。

「いじえ、それほどではないません」

医局は中央門のそばにあり、後面をつかむ三部門も同じ医局室
を構えている。

壬氏はよくそこに現れる。

宦官ならば内侍省にいるべきだらうが、この男はどの部屋にも所
属せず、むしろすべてを監視するように眺めていた。

(富田たちよつも上の立場ねえ)

可能性としては現帝の後見人といったところであるが、二十歳そこ
そこの青年がそれとは考えづらい。その子息であったとしても、わ

ざわざ宦官になる必要もない。

玉葉妃と親しいことから、そちら側の後見人とも考えられるが、むしろ……。

(皇帝の御手付きか?)

御通りの際、玉葉妃との仲を見る限り正道のようだが、人は見かけによらない。

いろいろ考えるのは面倒なのでとりあえず皇帝の愛人といつひとで片付けておこう。

「なんかものすごく失礼な」と考えてる顔に見えるんだけど
「気のせいではないですか」

一礼して振り返り、医務室に入るとビジョウひげのやぶ医者が「ごりごりとすり鉢をすつっていた。この医者の場合、薬を作るためでなく暇つぶしでやつてているだけだと猫猫はわかっている。
でなければ、毎回自分の作る薬を半分渡す必要はないだろう。

最初はわけのわからない小娘と思つていたらしいが、猫猫の作る薬をみて段々態度が軟化してきた。

いままでは、茶菓子をだし、必要な材料を分けてもらえたるよいつになつたのだが、医局としてそれはあまりよくないことである。
守秘義務だとか、なんだとかあまりにないのである。

「薬を見てもらえませんか?」

「おお、嬢ちゃんかい。ちょいとまつてな」

茶菓子と雑茶を用意する。甘い饅頭の類ではなく煎餅である。
辛党の猫猫にはうれしい。

最近、いろいろ餌付けされている気がしないでもないが。

やぶだが人は良い。性格はいいが、仕事はできない型タイプである。

「私の分もお願ひするよ」

甘いたおやかな声がする。

後ろを振り返らなくとも、なにやら輝かんばかりの空気が回りに立ち込める気がする。

やぶ医者は驚きと高揚を浮かべた顔で、せっかく用意した煎餅と雑茶を、白茶と月餅に替えて持ってきた。

(煎餅が……)

輝かしい笑顔が横に座っている。

身分差を理由に同席を拒否したが、無理やり肩を押さえこまれた。見た目の優しさと全く違う強引な行動に猫猫は辟易した。

「老師せんせい、すまないが、奥からこれを取りつてくれないか?」

紙切れを渡す。

遠目からみても、かなりの数が書かれていた。しばらく時間が稼げよう。

やぶ医者は目を細めると、残念そうなまなざしで奥の間に入った。

(最初からそのつもりだったんだるつな)

「本題はなんでしょうか?」

察しのよい猫猫は、湯飲みを揺らしながら聞いた。

「幽靈鑑ゆうれいかんとは知っているかい？」

「噂程度に」

「じゃあ、夢遊病つてのはわかるかい？」

猫猫の田の端に輝きが宿ったのを王氏は見逃さなかった。

くくくと、天女の笑みに意地の悪さが混じる。

大きな手のひらが猫猫の頬を撫でる。

「それはどうやつたら治るんだい？」

甘い甘い果実酒のような声でたずねた。

1-1 開闢騒動その一

「そんなものわかりません」

自分を卑下しないが、過剰にもとらえない猫猫の答アカマタえだった。どんな病氣か知っていたし、患者も見たことがある。その結果いえるのはこのことだった。

「薬で治せるような病氣ではあります」

気の病である。

妓樓の遊女がこの病にかかりたとき、ねやじどネヤジドのせなんの処方もしなかつた。

薬で治るものではなかつたからだ。

「薬ではなく」と

何なら治るんだ?と聞いていた。

「私の専門は薬です」

言い切つたつもりだが、横をちらりと見ると憂いを含んだ天上人の顔があつた。

(田を呑わせてはだめだ)

野生動物でも扱うかのことを青年から視線をそらす。そらすがそら

せない。回り込んでは猫猫のほうを向いていた。

かなり粘着質である。

「……努力します」

ものすぐ嫌な顔をしながら答えていた。

夜半に迎えに来たのは、宦官の高順ガオシュンだった。

寡黙で無表情なところまでつつきにくそうに思えるが、猫猫はむしろそこに親近感が湧く。

(あまり宦官ぽくない人だよな)

宦官は物理的に陽の気を取り扱っているため、女性的になることが多い。

体毛が薄く、性格は丸く、性欲のかわりに食欲が増し太りやすくなる。

一番わかりやすいのは、やぶ医者の例だ。

高順はとこうと、体毛は濃くないが、精悍で後宮とこう場所にいなければ武官と間違えられることだらう。

(どうしてこの道を選んだのだろう)

気になつても聞いてはいけないことくらいわかる。黙つて頭を振つた。

灯籠を片手に持ち、先導する。

月は半分の大きさだつたが、雲がないだけ明るかった。

昼間しか見たことのない宮内は、まるで別の場所のようだ。時折、がさがさと物音がしたり、なんだか喘ぎ声のようなものが木陰から聞こえたりしたが無視することにした。

まあ、宮中にはまともな男性は皇帝以外いないところだ、恋愛の形など至てもしかたないわけである。

「猫猫さま」

高順が話しかけてきた。

「敬称はいりません。高順さまのほうが位せ高いでしょう」「ではシャオマオ小猫」

(こきなり小付けですか)

案外軽いのか、いのちにこわんとか思いながら、猫猫は頷いた。

「王氏ジンシさまをモ虫でも見るような目で見るのはやめていただけませんか」

(やつぱ、ばれてるのか)

ここ最近、露骨に表情筋が反応して、鉄面皮では隠しきれないと。
首がどぶことは今のところないと思うが、節制せねばなるまい。お

偉こわんことって、虫けらは猫猫のほうである。

「今日も帰るなり、『なめくじでも見るような田をされた』と報告され」

（たしかに、粘着質でべたべた気持ち悪いとは思いました）

いちいち報告していることも粘着質だ。

「身を震わせながら、潤んだ瞳で微笑んでいらしてました。悦どいのはあれを言つんですね」

誤解しか生まないような語彙を、至極真面目に答えてくださいました。

むしろ、虫けらから汚物に下がる勢いである。

「……、以後気を付けます」

「ええ、免疫のないものは、一目見るなり昏倒しかねないので、処理が大変なのです」

深いため息に苦労がにじんでいる。

大変疲れるお話をしているうちに、東側の城門についた。

城壁は猫猫の四倍ほどの高さがある。外側は深い堀で、食糧や資材の運搬、時折、下女の入れ替わりの際に、橋が下ろされる。

後宮で脱走は極刑を意味する。

門には、常に衛兵が張り付いている。内側に宦官が一人、外側に武官が二人。門は二重になつており、詰所が外側と内側両方についている。

跳ね橋を下ろすも上げるも人力では足りないので、牛が二頭飼育されていた。

猫猫は近くに広がる松林にあるものを探しに行きたい衝動にかられたが、高順がいるからかなうわけもなく庭園の東屋に座った。

半月を背景にそれは現れた。

宙を舞う白い女の影。

長い衣とひれを纏い、踊るような足取りで城壁の上に立つ。

衣が揺らぎ、ひれが生き物のようになれる。長い黒髪が、闇の中で照らされ、淡い輪郭を際立たせる。

「月下の芙蓉」

ふとそんな言葉が頭によぎる。

高順は一瞬驚いた顔をすると、ぱつぱつと口をやいた。

「勘がいいですね」

女の名は『芙蓉』^{フジツバ}、中級妃。

来月、功労として下賜される姫である。

夢遊病といつのは、よくわからない病氣である。寝てゐるのにあたかも起きているような動きをする。何が原因といえば、心の転轍であり、薬草をいくら煎じても意味がない。

とある遊女がその病にかかつた。

朗らかで詩歌の上手い女で、身請け話が持ち上がっていた。

しかし、その話は破談となる。

幽鬼にでもとりつかれたかのよつて、毎晩妓楼を散策しているのだ。歩き回る妓女をやり手婆が止めようとすると、爪で肉をえぐられた。翌日、妓楼のものがみな不審な行動に詰め寄るが、妓女は朗らかな声でこいつ語るのだ。

「あら。みなさん、どうしたの？」

記憶のない彼女の素足には、泥と擦り傷がついていた。

「それでどうなつた？」

居間には壬氏^{ジンシ}と猫猫^{マオマオ}、高順^{カオシュン}の他に玉葉妃^{キヨクヨウ}もいた。公主は、紅娘^{ホンニヤン}にまかせている。

「なにもありません。身請け話がなくなつたら、徘徊はなくなります」

したので

にべもなく猫猫は言ひ。

「つまり、身請け話が嫌だつたつてことかしら？」

「おそらく。相手は大店ですが妻子どころか、孫までいる身分でしたから。それに、あと一年も働けば、年季はあけたのですよ」

気に入らない相手に身請けされるなら、あと一年奉公を我慢したほうがいいらしい。結局、その遊女は新しく身請け話もなく年季が受けたのだった。

「極端な気持ちの高ぶりがあつたあとに徘徊が多いので、気持ちを落ち着かせる香や薬を配合したのですが、まあ、氣休めにしかなりません」

「ふーん」

面白くなさそうに壬氏が頬杖をついている。

「本当にそれで終わり？」

ねつとうとした視線に対し、侮蔑の表情を浮かべるのを我慢する。隣では、無言で声援を送る高順がいる。

「それでは仕事に戻りますので失礼します」

一礼して部屋を出る。

少し時間をさかのぼる。

幽靈見学の翌日、猫猫が向かつたのは東側のおしゃべり娘、小蘭の元だった。

小蘭は猫猫に会つなり、玉葉妃のことを根ほり葉ほり聞き出そつとしたので、さしあたりのない情報と交換に幽靈騒動について聞き出した。

幽靈騒動が起き始めたのは半月ほど前。最初は北側で見つかつたらしい。

それからまもなく東側で見つかるようになり、毎晩見られたとのこと。

衛兵たちは怪談話に恐れをなして、なにもしない。

今のところ害があるわけでもないので、誰も何も処置しようとしたらしい。

まつたく役立たずな警備である。

次に向かつたのは、やぶ医者の元へ。

個人情報なんて言葉がない時代に、守秘義務などわかつていのい男は聞いていないことまで話してくれる。

最近、元気のない芙蓉姫のこと。

息を吐けば飛び去りそうな小さな属国の三番田で、姫という肩書でありながら上級妃にもなれないご身分。

北側の棟持ちで、舞踏が趣味だが小心者で緊張しやすく、皇帝の御目通りの際失敗している。

踊りを除けば、特に目立つた容姿でもなく、入内から一年、いまだ御手付きもないらしい。

今度、下賜される先は、幼馴染の武官の元だところので、幸せになればいいということ。

(なある^{モビ})

猫猫は、頭の中でなにかが組みあがった。

しかし、推測の域を出ないそれをいうのはどうであつたか。

(おやじが推測でものを話すなつていつてたから)

だから話さないこととした。

大人しい色白の姫は、頬を染めて中央門をぐぐる。
目立つた風貌ではないものの、幸せを感じた明るい頬に皆が嘆息した。

下賜されるならこうでありたい。

その光景が広がっていた。

「私にくらこ話してもいいんじやないかしら~」

艶やかな笑みを浮かべる玉葉妃、一児の母であるが実年齢は一十に満たない。少しお転婆な笑みが浮かんでいた。

猫猫は一瞬、考え込んだ。

「あくまで推測ですので。あと、気分を害されなければ」
「自分で聞いておいて、腹は立てませんよ」
「他言無用であれば」
「口は堅くつてよ」

猫猫は、妓楼の夢遊病者の話をした。

先日、壬氏たちの前でしたものと別の、もう一人の夢遊病者の話だ。

前の遊女と同じく、身請け話が持ち上がったといひで病になり、そして破談になつた。

しかし、その後も夢遊病は止まらず、前回と同じように薬を処方しても氣休めにもならなかつた。

そんな遊女に新たに身請け話が持ち上がる。楼主は、病氣ものを身請けさせるには忍びないといったが、それでも身請けしたいということだった。しかたなく、前の身請け話の半分の銀で契約は成立了た。

「後程わかつたのですが、これは詐欺だったのです」
「詐欺？」

先に身請け話をした男は、あとから身請け話をした男の知り合いだつた。遊女が病のふりをするとわかつていて、破談にする。そして、本命の男が半額で身請けする。

「遊女はまだ年季が残つており、男は身請けする銀が足りなかつた」「つまり、この遊女たちと芙蓉姫は同じだつてこと?」

幼馴染の武官は、属国とはいへ一国の姫に求婚できる身分ではない。武勲を立てていつの日か姫を迎えて行くつもりだった。

しかし、姫は政略により後宮に入ることになる。武官を思つていた姫は、得意の舞踏を失敗して皇帝の気を引かないようにしていた。案の定、一年間夜伽はなく身はきれいなままである。

武勲を集め、次の勲功で芙蓉姫が下賜されるとなつたといふ、姫は怪しげな徘徊をするようになる。

間違つても、皇帝が芙蓉姫を惜しいと思わないよう、御手付きにならぬいよつて。

御手付きになれば、下賜されるのは後になる。また、処女性を重んじる芙蓉姫にとつて、夜伽を行つた時点で幼馴染に顔向けできだらう。

東門で踊つていたのは、戻つてくる幼馴染の祈願のため。怪我をせぬように祈るため。

「あくまで推測です」

「なんていふか、帝については、なきにしもあらずなので何も言えないとわ」

寵妃は少し困つた顔をしている。

「芙蓉姫がうらやましいなんて言つたら、私はひどい女かしら」

「そんなことないと思います」

つじつまは大体あつてていると思うが、壬氏に話す氣はない。
そのほうが幸せに違ひないから。

あの柔らかい素朴な笑みをそのままにしたかった。

問題はすべて解決したかに見えたが……。

実はひとつだけ謎は残っていたのである。

「どうやって上ったんだろう?」

猫猫は自分の四倍もある壁を見上げると、首を傾げるのだった。

13 桐鶴（前書き）

暴力表現があります。

がしゃん、と何かが落ちる音がする。

芋と雑穀を煮た粥と茶、すりおろした果実がばらまかれる。

「こんな、下賤の食べ物を梨花リファさまに食べさせる気気?作り直しても
らいなさい」

派手な化粧をした若い女官は、まなじりを上げていた。梨花妃につく侍女の一人である。

(あーあ、面倒くさい)

ため息をまじえながら皿を拾い、こぼれた食事を片付ける。

マオマオ 猫猫がいるのは、水晶宮。

梨花妃の居住である。

周囲にはこりみつけのような視線がいくつも。

あざ笑うかのような目、さげすむような目、敵意をあらわにする目。

玉葉妃に仕える猫猫にとつては敵地も同然、針のむしろだった。

「噂の薬師どのに頼みたいことがある

皇帝が玉葉妃の元に現れたのは、昨晩のこと。
いつもどおり、毒見を行い、部屋をあとにじよつとしたとき。

初めて声をかけられた。

(噂つてなんなんだよ)

皇帝は偉丈夫で美髪をたくわえているが、年齢はまだ二十半ばくらいいだ。これで国の最高権力を持っているのだから、後宮の女たちが丑をさらつさせるのは無理もないが、いかんせん猫猫である。「長い髪だな、さわってみたい」くらうにしか思つていない。

「なんだいやいましょうか?」

恭しく頭を下げる。下女の身分としては、下手な対応を取る前に退室したことになるである。

「梨花妃の容体が悪い。しばらく見てくれないか

とのことだった。

帝の言は、天上の言。

首と胴はまだ仲良くしてこしたい猫猫としては「御意」と答えるしかなかつた。

『見てくれ』といふことは、『治せ』と同義である。

寵愛がなくなつたとはいへ、いくらか愛着が残つているのか、それとも、有力者の娘をないがしろにできないのかどうでもよい。治さなければ、首がどびかねない。

一蓮托生である。

(それにしても、他の妃の前でいつ話でもないのこ)

猫猫にそんな依頼をしておき、悠々と夜食を食べ、玉葉妃と仲睦まじきことをおこなつた帝は、やはり帝といつにきものなのだとつくづく思ひ。

梨花妃を見るにあたつてまずははじめたのが、食生活の改善だった。

現在、毒おしろいは王氏の言により、後宮内では使用不可となつてゐる。卸した業者があれば、ひどく罰するよひ徹底した。

ならば、身体に残つた毒を排出することが先決だ。

食事は白がゆが盛つてあるものの、魚の素揚げのあんかけに、豚の角煮、紅白の饅頭に、ふかひれや蟹といった豪華な料理である。栄養はあるが、胃腸の衰えた病人に食べさせるには重すぎむ。

よだれができるのも押さえつつ、料理人に作り直しを命じる。勅命と云つて、しがない下女風情の猫猫にもそれなりの権限が持たされていた。

纖維質の豊富な粥に、利尿作用のある茶、消化のよい果実。

残念なこと、先ほど床にぶちまけられた。

勅命云々よりも、玉葉妃に仕えていた容貌悪しき下女が気に入らなかつたのだろう。

言いたいことはたくさんあるが、ぐつとじりられて片付ける。

新たに侍女が絢爛豪華な食事を持り、梨花妃のもとへ運び入れられたが、しばらくするとほとんど手も付けられずもどる」となる。残りは端女たちの「褒美となる」とだ。

触診を行いたいところだが、天蓋付の寝台のまわりには侍女がまとわりつき、恭しくもまったくない看病を行っている。寝ているところにおじろいをはたけば、咳のひとつもでもるものなのに、

「空氣が悪い。下駄のものがいるからだ」

と、部屋を追い出されてしまった。

手のだしようがない。

（あさまでは、衰弱死は確実だな）

毒がたまつ過ぎて排出が間に合わないのか、それとも気力が足りないのか。

部屋の前の壁に寄りかかり、自分の首がはなれるまで何日かと指を折つてみると、周りから嬌声が聞こえた。

ものすごく嫌な感覺がして、ものすごく重々しく顔を上げると、ものすごく綺麗な顔がすこぶる陽気に笑っていた。

「なにかお困つのよつですね

「そのよつに見えますか

棒読みの半眼で答える。

「やのよつて見えますか」

じつくりと見つめてくるので次第に田線がそれる。それを追ひよつて長じまつげが近づいてくる。

田^トが合^ハえば、条件反射で汚物を見るよつに接してしまうだらけ。

「なんなの、あの女」

ぼそりと毒氣づく声が聞こえる。食事を下げる下女だ。

ものすゞじへ屈たたまれない。周りから恐ろしい空気が漂つてくる。

耳元で甘い蜜の声がある。

「どうあえず中に入らつか」

頷く前に部屋に押し込められた。

入ったところで、部屋には取り巻きたちが先ほどのも険しい顔でにらんでくれる。

しかし、隣にいる天女の様相を眺めると、取り繕つたかのように淡い笑みを浮かべた。

女とは本当に恐ろしい。

「帝のはからいを無碍にするのは、美しき才女たちに似合いませんよ」

壬氏^{ジンシ}の言葉に唇を噛みつつ、そつと寝台の前から退いた。

「ほれ、いけ」

背中を押され、猫猫はつんのめる。

一礼をし寝台の前に立つと、血管の浮いた色味のない手をとった。薬ほどではないが、医のつべ類はそれなりに経験がある。

梨花妃は目を瞑つたまま、抵抗もしない。眠っているのか、起きているのかもわからない。魂の半分はすでにあの世に流れただ。

瞼の奥を見るべく、顔に指をかける。

さらりとした感覚が指を滑つた。

以前と変わらぬ、真っ白な肌だった。

(前と同じ肌色?)

猫猫の表情が強張り、侍女たちのほうを向く。その中のひとりの前に立つと、低い、押し殺すかのような声できいた。

「妃の化粧をしているのは、おまえか」「ええ、さうよ。侍女たる勤めですもの」

食い入る猫猫にどこかおびえながら答える侍女。精いっぱいの虚勢を張る。

「梨花さまには常に美しくあつてほしいもの」

自分が正しいのだといわんばかりに。

「そりゃ

ばちゃん、と大きな音が響く。

侍女はなにが起きたのか理解できないまま、力の向かう側に倒れこんだ。

頬と耳が異様に熱い。

「なにすんのよー」

呆気にとられた周りの中で、一人が猫猫に食つてかかる。

「ああ？ 莫迦に折檻するだけだよ」

人を食つた言い方で倒れた侍女の髪をわしづかみにして、引きずる。化粧台の前で止まるときいた手で、彫り物の器を手にする。蓋を開けると、中のものを侍女にまぶした。

げほげほと咳をする。皿には涙が浮かんでいた。

「よかつたなあ、これで妃と同じくきれいになれるぞ

髪をひつぱりあげ、獲物を狩る獣の笑みを浮かべる。

「毛穴から、口から、鼻から毒の気が全身にまわるからな。お慕いする梨花さまと同じ、枯れ枝のような手と落ちこんだ眼窓と血の氣の失せた肌が手に入るぞ」

「そ、そんな……」

「なんで、禁止されたかわかつてんのか、毒だつってんだろ……。」「だつ、だつて。一番きれいだから。梨花さまも喜ぶと思つて」「誰が自分の餓鬼殺した毒を喜ぶんだよ」

子どものような言い訳に、猫猫は舌打ちを鳴らすと髪の毛をはなした。指には長い髪が数本巻き付いている。

「さつわと、口やちこどこ。顔も洗つてこい」

そもそも部屋を出る女官を見送ると、今度は他の侍女たちをみた。

「おこ、こままだと、病人こなわるだ。わつわと掃除し」

自分が散らかしたこと棚に上ば、粉だらけの床を指した。侍女たちはびくと身体を震わせると、掃除道具を取りに行つた。

腕組みをして、ふんと鼻を鳴らす。

「女とは本当に恐ひじ」

両手を袖の中に入れ、ぽつりとつぶやく。「存在すら忘れていた。

「あつ」

猫猫は急激に頭から血が降りていくのを感じると、その場で蹲つた。

13 時局（後書き）

育ちが悪いので、上ひが素のしゃべりです。

梨花妃の容体は思った以上に悪かつた。

雜穀の粥を重湯に作り直したが、匙から吸う氣配はなく、口を開けて流し込むとゆっくり嚥下させた。

部屋の換気を行うと、むせるような香が薄れ、かわりに病人特有の匂いがする。

体臭をごまかすために香をたきしめていたのだろう、風呂に何日も入っていないようだ。無能な侍女たちに憤りが増す。

湯桶と布を準備させ、呼びつけた侍女たちとともに身体を拭く。侍女たちは難色を見せたが、猫猫^{マオマオ}が睨み付けると大人しくしたがつた。肌は乾燥し、水をはじかず、唇は痛々しげに割れていた。紅の代わりにはちみつを唇に塗り、髪は簡単に結わえる。

あとはことあるごとに茶を飲ませる。時折、茶の代わりに羹^{あつもの}を薄めて与える。

小用の回数が増える。

怪しげな新参者に敵意を示すかと思ったが、人形のような梨花妃は概ね大人しく世話を受けていた。うつろな目は誰が誰かを認識しているのかわからなかつた。

一度に食べる重湯の量が茶碗半分から一杯に増えると、少しづつ中の米粒の量を増やしていく。顎を押さえずとも自分で嚥下するようになると、肉の旨味をとじこめた汁物とすりおろした果実を加えた。

小弔も手伝いなしてできるよつたなる頃、ふと梨花妃の唇が動いた。

「……………のか」

漏れ出る言葉を聞き取るため、梨花妃のそばに立つ。

「どうして、あのまま死なでくれないのか

小さな消え入りそうな声だった。

猫猫は眉をひそめる。

「なりば、食事をとらねば」とことです。粥を食むところには、死にたくないからでしょ。」

と、温めた茶を梨花妃の口に含ませた。

「くこと喉が鳴ると、

「わづか……」

かすれた笑いがこぼれた。

猫猫に対する侍女たちの反応は、一つに分かれた。

猫猫を怖がるものと、怖がりながらも反発するものだ。

(やつすぎたか)

どうにも、感情の沸点をこえると過激な反応になってしまつ、悪い癖だと思った。

無愛想だが概ね温厚でとおつてゐる猫猫としては、遠巻きに鬼か妖怪かを見る眼つきでみられると地味に傷つくわけである。

今回の場合、梨花妃の看病に必要だといつことで、仕方ないとした。

帝だか、玉葉妃^{ヨクエヒ}の命だかなにか知らないが、きらきらしい壬氏^{ジンシ}のがちよくちよくあらわれてくれた。使えるものは何でも使う勢いで、水晶宮^{サクナ}に突貫工事で風呂場を作らせた。元々あつた湯殿に加えて、蒸氣風呂^{サウナ}ができた。

用がないのでもう来るな、と猫猫なりに婉曲に伝えるのだが、壬氏は化け物のごとく扱われる猫猫をことあるごとに笑いにくるのだった。

暇人すぎる姫宮である。

毎度、菓子折りを持つてきてくれる高順^{ガオシュン}を見習つていただきたい。ああいうまめなのがいい日那になれるだらう、姫宮であるが。

纖維質を取り、水分を取り、汗をかき、排せつを促す。

身体から毒を排出することだけを考えて一か月が過ぎると、梨花妃は自分で散歩に出かけるまでになつた。

以前の豊満な肉体はまだ取り戻すのに時間がかかるが、頬に赤みがさし、もう死の淵をさまようことはないだらう。

翡翠宮に戻る前夜、挨拶をした梨花妃のもとに向かつ。

意識がはつきりしてきたら、下賤のものなどと罵られることを予想していたが、それでもなかつた。

自尊心はあるが高慢ではない。東宮のあれこれで、嫌なお嬢様を想像していたのだが、実際は妃にふさわしい人格を持っていたようだ。

「それでは、早朝に辞させていただきます」

今後の食事療法、いくつかの注意点を伝えて部屋をでようとすると、

「ねえ、私はもう子は生せないのかしら」

何の抑揚もない声だつた。

「わかりません。試してみればよろしくかと
「帝の寵愛は潰えたのに?」

彼女のいわんとするとはわからなくもなかつた。

元々、東宮を身ごもつたのは、寵妃である玉葉妃のつなぎで夜伽をしていたからだ。

公主と東宮が三ヶ月違いで生まれているのは、それを如実に語つていた。

「私がここに来るよつて命じたのは主上の意図であります。私が戻る以上、帝も梨花さまのもとにいらっしゃられるのではないか」と

それが政治的であれ、感情的であれ問題はない。

やる」とは一緒だ。

「玉葉妃の言葉も聞かず、みすみすわが子を殺した女が、彼女に勝てるのかしら?」

「勝てる勝てないの問題ではないと思います。それに、間違えは学習すればいいのです」

猫猫は壁に飾られた一輪挿しを取る。星形の花を咲かせた桔梗が飾つてあつた。

「世には丘、千の花がありますが、牡丹と菖蒲のどけりが美しいといふのは、決めつけるものではないと思います」

「私には胡姫の翡翠の瞳も淡い髪もなくてよ」

「他のものがあれば問題ないかと」

と、猫猫は視線を梨花妃の顔から下に移動させた。
普通、瘦せる部分はそこからだといわれているが、ちゃんと哈密瓜メロンが二つくつついていた。

「それだけの大きさはもとより、はり、形は至宝かと」

妓楼で田の肥えた猫猫がいうのだ、間違いない。

玉葉妃に仕える身としては、あまり肩入れするわけにはいかなかつたが、最後に手土産をひとつ置いておくことにした。

「ちょっと、耳を貸していただけますか」

『こよし』こと周囲に聞こえない声で、梨花妃にあることを教えた。

遊郭の小姐たちが、「覚えていて損はない」といった秘術である。

林檎のように真っ赤な顔をした梨花妃が何を聞いたのか、侍女たちのあいだでしばらく話題になつたという。

その後、翡翠宮にて、帝の御通りが一時極端に減つたことがあった。

「ふう、睡眠不足から解放されるわ」

と、玉葉妃が言ったのに猫猫が田を泳がせたのはまた別の話である。

(やつぱりあつた)

洗濯籠片手に喜色を浮かべる。

東門のそばの松林、生えているのは赤松だ。

後宮内は概ね庭園の管理は行き届いている。松林も年に一度枯葉や枯れ枝を取り除かれしており、それはとある茸の生育を促すのである。

手に持ったのは笠の広がりも少ない松茸であった。

匂いが嫌いという人間もいるが、マオマオ猫猫は好物であり、四つに裂いて網で焼いて塩と柑橘を絞つて食べるのは至福のときだ。

小さな林だが、都合よく群生を見つけたので籠の中には五本の松茸が入っている。

(おつちゃんのところで食べようか、それとも台所で食べようか)

翡翠宮で食べるとなると、食材の出所を聞かれるかもしれない。林でとりましたとか、ちょっと女官としてはあってはいけないことがもしれない。

なので、人は良いが仕事が駄目なお人よし医官のもとに向かう。好きだったらそれでよし、嫌いでも見逃してくれるだろう。

途中、シャオラン小蘭のところによるのも忘れない。ともだちの少ない猫猫に

は貴重な情報源である。

梨花妃の看病で肉の削げ落ちた猫猫は、戻るなり先輩侍女たちに太らされることとなつた。相対する妃のもとで一ヶ月もいたというのに、その反応は嬉しい一面、困るものもあり、籠には茶会のたびに貰つ月餅や^{ビスケット}干を持て余していた。

甘いものはいくらでも入る小蘭は皿を輝かせ、短い休憩の間ずっと猫猫と話してくれた。

あいかわらず、怪しげな怪談めいた話が多くつたが、

「富中の女官が媚薬を使って女嫌いの堅物武官を落としたのよ」

なる話を聞いてなんだか冷や汗をかいだ。

(うん、たぶん関係ないはず。たぶん)

そういえば、誰に使うのかまったく聞いていなかつた気がする。

富中とは、ここ以外の廻延内のことについて。

まともな男性がいる分、競争率の高い花形職業である。

ちなみにここは、まともな男性がない分、さみしい職場ということである。

医局には、どじょうひひげのおっさんその他に、青白い顔をした見慣れ

ない宦官がいた。

なにかしきりに手をさすっている。

「おお、嬢ちゃん、ひょうびよかつた

「なんですか」

「手がかぶれたらしくてね。すぐ、軟膏を作ってくれないかい?」

どうにも後宮の医を統べるもののは言葉ではないのである。
まあ、いつものことなので、隣の薬棚のある部屋へ向かう。

そのまえに、籠を置いて、松茸をとりだす。

「炭とかありますか?」

「ああつ、立派なもんとつてきたな。醤と塩もあつたほうがいいな

好物なのか話が早い。浮かれた足取りで食堂のほうへ調味料をもら
いに行く。

可哀そうに病人は置いてかれたままだ。

(嫌いじやなければ、一本くらこあげよつ)

材料を「じつ」りとかき混せて猫猫は思つた。

やぶ医者が調味料と炭鉢と網を持ってきたころ、ねつとつとした軟
膏が出来上がる。

宦官の右手を取り、赤い発疹に丁寧に塗りつけた。少しにおいがき
ついが我慢してもらわなくては。

薬を塗り終えると、少しだけ青白い顔がもどつたようである。

「いやあ、優しい下女だねえ」

「やうだらう、よく手伝ってくれるんだ」

のほほんとした会話をする宦官一人。

宦官といえば、時代によつては権力欲にまみれた悪人のごとく扱われるが、実際はほんの一握りである。大抵は、このように穏やかな性格をしている。

(例外もありますが)

ちらりと不愉快な顔が浮かんだので、消去する。

炭に火をつけ、網を置き、手でさいた松茸を置ぐ。また勝手に果樹園から失敬した酢橘を切る。

独特の香りが鼻にかかり、少し焦げ目がついたところで皿に盛り、塩と酢橘をかけていただいた。

一人のおっさんともに、口に入つてるので共犯者決定である。

猫猫がもぐもぐと口を動かしている中、やぶ医者はのんきに世間話をしている。

「嬢ちゃんはなんでもできるから助かっているんだよ。軟膏以外にもいろんな薬を作ってくれるんでね」

「ほお、そりゃ結構だね」

まるで実の娘に接するようなのでこきこき困ってしまう。
ふと、もう半年以上も会つていないおやじさんを思い出した。

ほんの少し感慨にふけつていると、やぶ医者は実際にやぶ医者らしい失言をしてくれた。

「ああ、作れない薬はないんじゃないのかね」

(はあ?)

誇大広告はよしとげだすことこの前こゝ、田の前の面面は反応していった。

「なんでもかい?」

「なんでもさ」

ふふんと鼻を鳴らすやぶ医者、ああ、やぶ医者たる所以である。

「じゃあ、呪いを解く薬も作れるのかい?」

男はかぶれた右手をなでながら言った。

氣色はさきほどとの青白い顔に戻っていた。

一昨日の晩のこと。

仕事はいつも「」のみの片づけで終わる。

後宮のあちこちから出た「」みは、荷車に集められ、西側で焼却される。

本来は夕方以降に火を放つのは禁止されているのだが、風もなく、空気も湿っているので問題ないと許可をだした。

下官たちが穴の中にじみを投げる。

仕事を早く終わらせたかったので、自分も同じよつと作業に徹する。

ふと、荷車の中に田てつへものがあった。

衣物の衣だ。

絹ではないが、上質のもの。捨てるにはもったいない。

どうしたものかと持ち上げてみれば、中にはばらばらの木簡が包まれていた。

包んでいた衣は袖口が大きく焼け焦げている。

いつたいどうこうことだ。

はてと頭を抱えたとて仕事は終わらない。

木簡をひとつひとつ拾い上げ、穴の中の火にくべた。

「すると、炎が勢いよく吹き上げて不気味な色にかわつたと」

「ああ」

小父さんは思い出すのも恐ろしい様子で肩を震わせる。

「その色は、赤や紫や青?」

「そうだよ」

猫猫はなるほどと頷いた。

今日聞いた小蘭の噂の元はここからだといつのか。

(西側の話なのこ、いじまでもまわるのか)

女官の噂は韋駄天よりも早いといつのは本当だね。

「ありやあ、昔火事で死んだ妃の呪いだ。やっぱ夜に火をつけるのがいけなかつたんだ。だから、こんな手になつちまつたんだ」

宦官の手のかぶれば、炎を見たあとにできたらしい。

「なあ、娘さん。呪いを解く薬を作ってくれよ
「そんな薬あるわけないですよ」

冷たく言い放ち席を立つと、隣の薬棚を「じりじり」とござりだした。

おろおろとするやぶ医者と小父さんを後田に、何かを卓の上に置いた。粉のようなものがいくつか、あとは木簡の端切れだった。

「いんな色じやありませんでした? その炎つて」

木簡に炭をつけ、火が灯つたことを確認すると、薬匙で田に粉をとり火に入れた。

橙色の炎が赤く変わる。

「でなければ、いぢり」

違う粉をいれると、青緑色に変わった。

「これでも、できますね」

松茸につける塩をひとつまみ入れると、黄色に変わる。

「嬢ちゃん、これは一体？」

驚いた様子でやぶ医者がきいた。

「色つきの花火と同じです。燃えるものによつて、色が変わるだけです」

楼閣の客に花火職人がいたのだ。門外不出の秘伝の技も、闇やみの中では世間話に変わる。隣に子どもが寝起きをしていることも知らないで。

「じゃあ、この手はなんなんだ？呪いじゃないのか？」

猫猫は白い粉を差し出した。

「これを素手で触ると、発疹ができることがあります。もしかして、肌が弱いのではないですか？」

「……そなうのか」

骨がなくなつたように、力なく座り込んだ。小父さんの顔には安堵と驚きが張り付いている。

木簡に付着していたのだろう、それを燃やすことで色とりどりの炎が生まれた。

ただそれだけだった。

(なんでもまた、そんなのがつてことだけ)

猫猫の考えは遮られた。

ぱちぱちと手を叩く音が聞こえた。

「お見事」

いつのまに、嫌なお客が立っていた。
変わらずの天上の笑みを浮かべて。

15 炎（後書き）

主人公は完全に理系です。

壬氏ジンシに連れられて来たのは、宮宣長の部屋だった。

中年の女官は、壬氏の指示で退出した。

正直、申し上げましよう。この生き物と同部屋一入きりなど、まったくもつて無理なのです。

マオマオ 猫猫マオマオとて、きれいなものは嫌いではない。

ただ、あまりにきれいすぎるとほんの少しの汚点が罪悪のように感じられて許せないのである。磨き抜かれた玉にほんの一筋の傷が入るだけで、価値が半分になるのと同じである。ゆえに、つい地面を這いずり回る虫を見るように接してしまつのだ。

(鑑賞物として接したい)

小市民猫猫の本音である。

女官と入れ替わるように高順ガオシュンが入ってきたときは、ほつとした。最近、無口な従者が癒し系に変わりつつある。

「これらは一体何色くらいいあるんだ?」

医局から持ち出した粉を並べる。

「赤、黄色、青、紫、緑、細かくわければもっとあります。具体的な数はわかりません」

「では、木簡にその色を付けるにはどうすればいい?」

粉のまま擦り付けるのは無理がある。いくらなんでも座しかね。

「塩ならば塩水につければいいだけです。こちも回しよひにこな
ると悪います」

白い粉をよせる。

「他のものは、水以外のもので解けるものがあるみたいですね。これ
も、専門外なのでわかりません」

「十分だ」

青年は腕を組んで、思考にふける。
それだけで一枚の絵になるようである。

壬氏が後宮内のいろんなことを掌握してこることとはわかっている。
今の猫猫の言葉がなにかの根拠になつたのだろう、頭の中ではぱらぱ
らになつた欠片を組み合わせているようである。

(暗号……かな?)

導き出される答えはおそらく同じものであろう。しかし、それを言
うべきではないと猫猫は重々承知していた。

雉も鳴かずば撃たれまい、である。

これ以上、用はなさそつなので、退出しようとするとい

「待て」

呼び止められた。

「なんでしょうか？」

「土瓶蒸しが好きだ」

何の？とこうまでもない。

（やつぱぱれてるか）

肩を落として、

「明日元でも探してしまひます」

と云えた。

ぱたんと、扉が閉じたのを確認すると、壬氏は甘いほひみつの笑顔をしました。かわりに水晶の切つ先のような視線になる。

「ここ最近で、腕にやナドを負つたものを探せ。とつあえず部屋付以上、それについて侍女も調べておけ」

「御意」

高順が退出すると、富田長が入ってきた。

「申し訳ないね。いつも場所を借りてしまつて

「や、そんなことは」

年甲斐もなく顔を赤らめてくる。

壬氏の表情には、また天上の甘露の笑みがはりついていた。

女とは「いつあるべきなのに。」

ほんのひと時だけ、唇を尖らせる、またもとの笑みを浮かべて、部屋を出た。

「はい、これ着てみて」

先輩侍女である桜花は猫猫に真新しい衣を差し出していた。インファ

色は生成りの上着に、薄赤の裳、袖は薄黄色でいつもよりも広がっている。

綿ではないが、上等の綿でできていた。

「なんですか、これ？」

色は下女にふさわしい地味なものが、デザイン意匠は実用には向かない。それに、胸元の大きく開いた服など、猫猫は着たことがないので、明らかに嫌な表情が浮かんでいる。

「何つて、園遊会の衣装だけど」

「園遊会？」

先輩侍女たちの好意に完全に甘えていた猫猫は、毎日毒見と薬作り以外は、外を駆け回り薬草採つたり、シャオラン小蘭とおしゃべりしたり、医局で茶をいただいたりしていた。ゆえに、上流階級の話題はほとんど耳に入らなかつた。

首を傾げる猫猫に呆れた顔で桜花が教えてくれる。

年に一度、宫廷の庭園で社交界が開かれること。後のいない皇帝は、正一品の妃を連れてくること。妃の世話をする女官もついていくこと。

後宮内では、ギョクヨウ玉葉妃が『貴妃』、リファ梨花妃が『賢妃』を冠している。他に一人、『徳妃』と『淑妃』を合わせて四夫人、それらが正一品となる。

本来、冬の園遊会は『徳妃』と『淑妃』のみ出席のはずである。だが前回、赤子を生んだばかりの玉葉妃と梨花妃は欠席したため、今回全員参加のこととなつた。

「全員参加、ですか」

「ええ、心してかからないと」

桜花の鼻息が荒くなるわけである。

ただでさえ、後宮の外にでる滅多にない機会であるうえ、イベント鈴麗公主のお披露目、上級妃の揃い踏みと行事満載なのだ。

侍女の数が少ない玉葉妃のため、慣れないことを理由にして猫猫が辞するわけにはいかない。そういう公の場所こそ、毒見役が重要視されることくらいわかっている。

(血の雨が降りかねない)

猫猫の勘は当たる。

困ったことに当たるのである。

「少し、胸元は詰め物をしたほうがいいわね。お尻の周りもかさましするけど大丈夫?」

「お任せします」

さあ、つまみひとつ帶を締めつけられ、裏の丈や袖の長さを調整する桜花はむりことじめをむしてくれた。

「うやんと、お化粧もしないことね。たまにま、そばかす隠す努力もしなやごよ」

にやりと笑う桜花に、ひきつる笑顔を返したのはいつまでもない。

ホンニヤン
紅娘から園遊会の流れを聞いてげつそりとした。

彼女は、昨年春の園遊会に出席しており、

「今年はなくて、安心していたのに」

と、ふつと、ため息をつく。

なにをするわけでもない。ただ、立つていればよいのだ。
あくまで妃はお客様側の立場であり、ただ皇帝に付き従つていればよい。その侍女たちも同じくだ。

演武に演舞、詩歌に一胡といった出し物を見、出された食事を食べて、適当に挨拶に来る官たちに笑顔を振りむけばよいだけである。

空つ風の吹く屋外で。

庭園はまあ皇帝の権力に比例する」とく無駄に広い。
ちょっと御手水にでかけようものなら、四半時は必要となる。

主賓たる皇帝が座を立つことはなく、妃たちもそれに従うしかない。

(鉄の膀胱が必要になるな)

春先の園遊会でまいりへういなら、冬せどんなるものになるやう。

そこで、猫^{マオマオ}は肌着に衣囊^{ボケツト}をいくつも付け、中に温石^{カイロ}を入れるやう

にした。また、生姜とみかんの皮を細かく削り、砂糖と果汁で煮て餡にした。

肌着と餡を紅娘に見せたといふ、目を潤ませて全員分作るよつに頼まれた。

作っている最中、暇人宦官が来て自分のも作れと言つてきた。

その従者もなにやら言つたげなので仕方なく一緒に作つてやつた。

また、夜の御通りの際、玉葉妃エモクコウヒが皇帝に話したらしく、翌日、皇帝直属のお針子と食事係がきたので作り方を教えてあげた。

なるほど、よほどの苦行らしい。

おかげで園遊会まで、内職で終わってしまった。

前夜によひやく手が空いたので、手もとにある薬草で薬を作ることにした。

「おきれいです、玉葉さま」

桜花たちの言葉は、世辞で言つてゐるのではない。

(さうすが、寵妃というだけあるな)

異国風情の漂う妃は、紅の裳と薄紅の着物を着ていた。上に羽織る大袖は裳と同じ紅で、金糸の刺繡が入っている。髪は大きく二つの輪に結わえられ、二つの花かんざしと真ん中に冠が乗せられている。花かんざしから銀の笄が伸び、先に赤い絹の房飾りと翡翠の玉が下

がっていた。

意匠^{デザイン}が派手なのに服に着られることがないのは、玉葉妃だからである。燃えるような赤い髪を持つ妃は、国で一番紅が似合つものだと言わっている。また、赤の中に翡翠色の瞳が輝くのも、神秘的な空気を漂わせていた。

猫猫たちの袴に薄紅を使うのも、それに従つてゐるという意味だ。

互いに揃いの衣をつけ、髪を結う。

玉葉妃はせっかくだからと、自分の化粧台から飾り箱を取り出した。中には翡翠のついた首飾りや耳飾り、簪が入っていた。

「私の侍女たちだもの。変な虫がつかないよう、所有權をつける
かない」と

そういつて、それぞれの髪や耳、首に飾りをかけていく。
猫猫には玉のついた首飾りをかけてくれた。

「ありがとうござこま……」

(ひつ一)

礼を言い終わる前に、後ろから羽交い絞めにされた。
桜花^{イシツバ}ががっしり腕を回していた。

「ああてと、お化粧しないとね」

刷毛を持ちにやにやするのは、紅娘である。他の一人の侍女もそれぞれ貝の紅入れと筆を持っている。

「いのところ先輩侍女たちが猫猫に化粧をさせよつて息巻いていたのを忘れていた。

「つふふ、可愛くなつてらつしゃー」

共犯者はここにもいたようだ。玉葉妃はいろいろと鈴の鳴る声で笑う。

動搖の隠せない猫猫に四人の侍女たちは容赦ない。

「まず、顔を拭いて、香油を塗らなくてはね

がしがしと濡れた布で猫猫の顔を拭いた。

『えつ？』

(あーあ)

顔と拭いた布を見比べながら、侍女たちは間抜けに声がそろつた。

(ばれちゃつたか)

「いのひとつ言つておくべ。

猫猫が化粧を嫌がった理由は、化粧が嫌いというわけでない。苦手というわけでもない。

むしり、得手不得手なら得意といえる。

ならば、なんだといえど、すでに化粧を済ませた顔だったからである。

濡れた布には薄茶の汚れがついていた。

皆がすっピンだと思っていた顔は、実は化粧^{メイク}後の顔だったわけである。

園遊会が始まるまであと半時こちじかんといついろ、玉葉妃ぎょくばくひと侍女たちは庭園の東屋で時間待ちをしていた。

池には色とりどりの鯉がはね、赤く染まつた紅葉が残り少ない葉を散らしていた。

「あなたのおかげで助かつたわ」

日の光は十分だが、風が冷たく乾いている。普段ならぶるぶると震えるしかないのだが、温石カイロをつけた肌着のおかげで皆それほど苦はない。

心配だつた鈴麗公主玲麗も、籠の中で丸まつている。籠の中には同じく温石を入れている。

「公主のものは時折外しては布を巻き替えてください。低温やけどになる場合がありますので。あと、飴は舐めすぎると口内がひりひりするので気を付けてください」

猫猫マコマコは替えの温石を手籠の中に入れている。公主のおむすや着替えもその中にある。

「わかったわ。それにしても」

ふふふ、と悪戯っぽい笑いが漏れる。他の侍女たちも苦笑する。

「あなたは私の侍女なんだからね」

と、翡翠の首飾りを指さした。

「 わよひのじやれこせす」

猫猫は言葉のままとらえることにした。

高順ガオシユンは、徳妃のジンシ機嫌をつかがつ主を眺めていた。

天女の微笑みと天上の甘露を持つ壬氏ジンシは、美姫と謳われた徳妃よりも艶やかであった。

普段の簡素な官服から、いくらか刺繡を加えて、髪に銀の簪をさしてだけなのに、絢爛豪華な衣をまとう妃をかすませてしまつ。

ここまで来ると嫌味な存在であるが、かすんだ妃本人が目を潤ませてうつとりしているので問題ないだろう。

まったく罪な人間である。

三人の妃たちを回り、次に玉葉妃のもとに向かう。池の向こうの東屋にいるのを見つけた。

四夫人に対しても平等に接すべき壬氏であるが、最近、どうにも玉葉妃の肩入れが強い。まあ、皇帝の寵妃ということとそれほど問題視すべきでないが、理由は他にあるのは明確だ。

妃に礼をする。赤い衣がよく似合つとほめる。

たしかに、似合つて美しい。胡姫の神秘をと生来のあでやかさが空氣にまで混じるようである。

おそらく、後宮内で壬氏に見劣りしない人物といえば、玉葉妃くらいだろう。

だからといって、周りの女官たちが美しくないわけではなく、各自自分の魅力を引き出していた。

壬氏のすごいところは、それを明確に口にするところである。誰もが自分が気に入っている部分を褒められたい、そこをうまくくのだ。

壬氏は嘘をつかない。

ただ、本当のことと言わないだけで。

平静を装っているようだが、左の口角がわずかに上がっている。長年、仕えてきた従者にはわかる。玩具を目の前にした子どもの表情である。

公主の顔を見るように見せかけて、小柄な侍女に近づく。

が。

そこには無表情でどこか見下したかのようなあまりに不遜な顔をする、見慣れない侍女がいた。

また来たのか、暇人野郎、とこつ顔を表に出さないよつて飯を付ける。

高順が見ているので、できるだけ穩便にいきたい。

「化粧しているのか？」

「いいえ、していませんけど」

口とまなじりに紅を入れているだけであとはすっぴんだ。鼻の周りに薄ら斑^はが残っているが気にするほどでもない。

「そばかすが消えているだ

「ええ、消しましたから」

残っているのは、昔、自分で針を刺して入れた黥^{けい}である。深く刺さず、薄い染料でつけたそれは一年ほどで消えてなくなる。たとえ、消えるとはいえ罪人の刑と同じことをするのに、おやじどのは難色を示していた。

「化粧して消したんだろ？」

「化粧を落としたから消えたんですよ」

(あー、適当にはいはい言つとけばよかつたかな)

猫猫は、返答を間違つたことに気が付いたがもう遅かった。

「おまえの言つてこることはおかしいだ、矛盾していぬ
「いいえ。そんなことはありません」

化粧とはなにもきれいにするだけのものではない。既婚の女がわざわざ醜くなるように化粧をする場合もある。

乾いた粘土と染料を溶いたものを、猫猫は毎日鼻の周りにつけていた。刺青のそばかすをぼやかすと、うまい具合にしみのようになる。まさか、そんなことをやっているとは思わず、誰も気が付かなかつただけだ。

そばかすとしみを持つた特に特徴のない顔の女。
だから醜女と呼ばれていた。

逆を言えば、そばかすもしみもなければ、ただの特徴のない、つまり平均的な整つた顔立ちであることが言える。
それはほんの少しの紅でも、雰囲気が変わり、普段の猫猫とはまつたく違う顔ができていた。

猫猫の説明に、なんだか理解できないといつ風に、壬氏が頭を抱えている。

「なんで、そんな化粧をするんだ？意味あるのか？」
「ええ、路地裏に連れ込まれないためです」

花街とはいえ、女に飢えた奴らもいる。そいつらは、大抵金も持たず、暴力的で、中には性病持ちも多かった。
当然、ごめん」つむりたい。

ぽかんとした壬氏がなぜか恐る恐る聞いた。

「連れ込まれたのか？」
「未遂ですよ」

いわんとした言葉がわかつたため、半眼でねめつける。

「かわりに入買いにかどわかれましたけどね」

後宮に売りとばす女は見目よいほうがいい。あのとき、たまたま化粧を忘れて薬草を取りに行つたのだ。薄れてきた刺青の染料をとるために。

「悪いな。管理が行き届いてなくて」

「別に、かどわかしの身売りと口減らしの身売りの区別なんてつかないだろ？ から、どうでもいいですよ」

前者は犯罪で、後者は合法にあたる。たとえ、かどわかしでも買った人間がそれを知らなかつたといえば、罰せられることはないのだ。

今現在、後宮でそんな化粧をしているのは、文字を書けることを隠していたのと同じ理由である。今更、どうでもよくなつたわけだが、いきなり素顔になるのも時機タイミングがわからずこのままでいただけにすぎない。

「ああ、申し訳なかつた」

(珍しく素直だな)

見上げようとするとい、頭にむくつと何かが刺さつた。

「痛いのですが

「そりゃ、やる」

ただの甘つたるい笑みではなく、どこか憂いと氣恥ずかしさの混じつた顔があった。

頭を触ると、何もつけていないはずの髪に冷たい金属の感触がする。

「じゃあ、あとは会場でな」

後姿のまま、壬氏は東屋を去った。

刺さっていたのは男物の銀の簪だった。

「あー、いいなあ」

桜花^{イシフラ}がもの欲しそうに見ていたのであげようと思ったが、他のふたりも同じ顔をしていたので手を引っ込めるしかなかつた。
ホンニヤン
紅娘^{ホンニヤン}は苦笑している。

「もう、早速約束破つたのね」

玉葉妃がすねた顔をしてみている。

猫猫の持っていた簪を取ると、結わえた頭にきれいに刺してくれた。

「私だけの侍女じゃなくなつたじゃない」

幸か不幸か、猫猫は富中、特に上流階級の話に疎い。
それが示す意味もわかつていなかつた。

園遊会は中庭に設けられた宴席にて行われる。大きな東屋に緋毛氈が敷かれ、長卓が一列に並べられ、その先に上座が設けられている。

主上を上座とし、西脇に皇太后と皇弟、東側に貴妃、徳妃、西側に賢妃、淑妃が座する形となる。東宮が身まかれた現在、現帝の同腹の弟が、第一継承権をいただいている。

それにしても、喧嘩を売るためだけの配置にしか思えない。

その弟君であるが、母が皇太后であるにもかかわらず日の田を見ない生活をしている。

表向きこいつして上座に席を設けられているが、空席である。病弱でほとんど自室から出ず、執務も行わない。

一部では、歳の離れた弟を皇帝が甘やかしているとか、もしくは幽閉しているとか、それとも皇太后がかわいがり過ぎて外に出しあたくないとしているのか、いろんな憶測も回っている。

まあ、**猫猫**には関係ないことである。

料理が出るのは毎過ぎであり、今は曲芸や演舞を楽しんでいる。

玉葉妃には、侍女頭の**紅娘**のみついており、なにか用がない限り他の侍女たちは幕の裏側で指示を待つのだ。

公主は皇太后があやしていた。

(「そ天幕を用意してくれ」)

幕といつてもまさに日隠し程度なので、風よけにもならない。

懐炉を持った猫猫たちが、寒いと思うのに、それが他の妃の侍女た

ちとくればたまらないだろ？

案の定、控えている他の侍女たちは身体を小刻みに震わせ、中には内股になつてゐるものもいる。今のうちに廁に行けば問題ないと思うが、他の妃の侍女の手前行くにいけないとこりかもしけない。

困つたことに、四夫人の侍女たちは主たちの代理戦争をしたがるのである。

各々こゝめる立場にある侍女頭はそれぞれの妃のそばについている。止めるものはいなかつた。

今現在、抗争の図は『玉葉妃軍対梨花妃軍』、『淑妃軍対徳妃軍』である。

ちなみに、玉葉妃軍嘗は総勢四人なので、向こうの侍女の半分もない。いささか不利かと思われるが、インフ桜花ががんばつていた。

「はあ、地味ですか？馬鹿じやないの？侍女つてものは、主に仕えるものでしょ。無駄に着飾つてどうするのよ」

どうやら衣装のことでもめてこらうとして。向こうの侍女たちの衣装は、梨花妃に仕えるということで、青基調、ひれがついているのと飾りものが多いのでこゝちらよりも派手である。

「なにいつてんの？見た目が悪いと、主が苦労するのよ。やっぱ、あの不細工を雇つてるだけのことはあるわー」

(おつ、田の前で莫迦にされていよいよだ)

他人事のように猫猫が思つた。言つまでもなく、不細工といつのは

自分のことであつた。

偉そうに胸を張る女官は、以前、猫猫に反発していた一人だつた。強気な性格だが、それに根性は付随しておらず、ことある「こと」に「お父様に言いつけてやる」と言つてはいたのだ。あまりにうるさいので売り言葉に買い言葉で、「じゃあ、言いつけられない身体にしてやる」と言つたら怯えて近づかなくなつたのだ。

(妓女流の「冗談は通じないのか）

少なくとも世間知らずのお嬢様には向かない言葉である。

「いないと」見ると、置いてきたんでしょ。あんな醜女連れて來たら恥もいとこねだものね。玉飾りの一つももらえないでしょ」「まつたく猫猫のことに気が付いていいらし」

(ひどい話だ。一か月も一緒にいたといふの？)

桜花が爆発して飛び掛かりそうなのを残り一人がおさえているのを見ると、そろそろ静かにさせたほうがよさそうだ。

猫猫は桜花たちの後ろにまわり、鼻を手のひらで隠して青い衣を着た侍女たちのほうを見た。

怪訝に目を細めた侍女が、何かに気が付くと隣の侍女に耳打ちする。
伝言遊戯のように、最後の意張りくせつた侍女に届くと、侍女は威圧して突きだす指先をふるふるとそれから、口をあわあわと開いた。

(よつやく気が付いてくれたか)

猫猫は自分なりに満面の、侍女たちから見れば獲物を狩る狼のよくな笑みを作る。

「あ、ああ、ああ」

「なつ、なによ」

後ろでにやにや猫猫が笑っていることも知らない桜花は、いきなり小動物みたいに震える敵対者をいぶかしむ。

「あつ、ああ。も、もひれくらじてあげるわ。か、感謝しなさい」

と、わけのわからない捨て台詞を吐いて、幕の端に向かつた。他に場所は空いているだらうに、猫猫たちと一緒に離れた場所に向かうのである。

ぽかんと呆氣にとられる桜花たちと、

(やつぱつ、傷つくな)

などと思つ猫猫。

気を取り直し、桜花は猫猫に田線を合わせて、

「もう、前からやな奴らだと思つてたけど。悪かったわね、不愉快な思いをさせて。本当はこんなに可愛いのに可憐に」

すまなそうに桜花が言った。

「気にしていないので。それより、温石かえなくてよろしいですか」「ええ、まだ温かいし、大丈夫。それにしてもなんでいきなり震えだしたのかしら?」「さあ、お花摘みにでも行きたかったのでは」

いけしゃあしゃあと猫猫は言つた。

ちなみに、現在の猫猫は、親に折檻され身売りに売られて捨て駒の毒見役になつた、に加えて、水晶宮で一ヶ月間壮絶ないじめを受け、自分の顔を汚したくなるくらいひどい男性不信に陥つてている少女といつ設定になつている。

困つたことに桜花たちの妄想力は年相応に半端ないのである。

壬氏が猫猫に突っかかるのも、天女のような御仁^仁が可哀そうな娘を気にかけているという図に描きかえられているので困つたものだ。

どこのをどうみればそうなるのか不思議なものである。

一方、もう一つの代理戦争はいまだ続いていた。

人数は、七対七。

白い衣装を着た侍女たちと暗色の衣装を着た侍女たちである。前者は徳妃、後者は淑妃側の侍女である。

「あそこも仲悪いわよね」

しみじみと桜花が言つ。

「齡十四と齡三十五。同じ妃でも親子ほど年齢がはなれてたらそりも合わないわよね」

「若輩の徳妃に、古参の淑妃。そりゃあ、ねえ。いろいろあるものね」

おつとりした侍女、貴園グイヨンが言つた。

「わうよね、元嫁姑アイランだし」

長身の侍女、愛藍アイランも頷く。

「嫁姑？」

なんだか後宮ごうぐうらしからぬ話に聞こえる。猫猫は首を傾げた。

「ええ、ちょっと複雑なんだけどぞ」

一人は先帝の妃と東宮妃の関係だったといつ。

先帝が身まかられたとき、妃は喪に服すため道士となつた。しかし、それは建前で、俗世を一度捨てることで先帝に仕えたことをなかつたことにして、今度は息子に嫁いだという。

(先帝の時代は五年前)

そのとおり、徳妃は齡九つ、たとえ政略でもなんだからやつとくる話である。11の年で妃になるとほ。

(こくへり好色でもやれはなによな)

美髭の皇帝を思い出し、口々言つてゐるところで衝撃の真実を知る
ことになる。

「ありえないわよね。九歳のお姑さんなんて」

愛蘭は耳を疑つうよつたことを語つてくれた。

20 園遊券の発行（複数枚）

モテ期です。

徳妃、里樹の第一印象は、空気が読めない子であった。

宴の第一部が終わり、休憩時間がもうけられると猫猫と貴園は公主のもとへと向かつ。貴園が冷たくなつた温石を取り換えるあいだ、猫猫は赤子の容体を見る。

(特に体調は悪くないか)

きやつきやと林檎のような頬をした鈴麗公主は、最初に出会つたころよりもずっと表情が豊かで、父たる帝からも、祖母たる皇太后からも可愛がられていた。

(しかし、こんな屋外にずっとこじるのはどうよ?)

これで風邪でもひかせれば、首がどぶかもしれないのでまったくもつて理不尽である。

おかげで、籠に職人を使ってわざわざ蓋をつくり、まるで鳥の巣のようになんねをつくる羽目になつた。

(まあ、可愛いからいいか)

子どもが好きではない猫猫でも可愛いと感つのだから、赤子とは恐ろしい生き物である。

はいはいをするようになつて、外に出たがる公主をやんわりと籠の中に入れ、紅娘に渡そつとすると、後ろから荒い鼻息が聞こえてきた。

絢爛豪華な濃い桃色の大袖を着た、若い娘がこちらを見ていた。後ろに幾人もの侍女を連れている。

愛らしい顔をしているが、口をとがらせて自分の不機嫌を見せつけているようである。

(これが幼姑?)

紅娘と貴園^{きえん}が深く頭を下げているのでそれにならう。

里樹妃はやはり不機嫌な顔のまま、侍女を連れてビロードへ行つた。

「あれが徳妃さまですか」

「ええ、そうなの。まあ、大体見てわかつたと思つけど」

「いろいろ読めないんでしょうか」

なにがといえば、その場の空気がである。

四夫人ともなれば、それぞれ己^じが象徴を『えられる。

玉葉妃^{ぎょくようひ}であれば、真紅と翡翠を象徴とし、梨花妃^{りはひ}であれば、群青と水晶、淑妃はたぶんお付の衣の色から黒だろづ。柘榴宮に住んでいるので、宝石は柘榴石といつたところか。

(五行からとつていてるとすれば、白が妥当なんだけど)

里樹妃の着ていた衣は濃い桃色で、いうなれば玉葉妃の赤い衣とかぶっている。宴席の席順を見ると、玉葉妃と里樹妃は隣り合つており、一旦見て色のつり合^いいが悪いのである。

(やういえば)

遠巻きに聞こえてきた女官同士の喧嘩も、そんな話題だった気がする。

「なんていうか、まだ幼いのよね」

深くため息をつく紅娘の一言がすべてを物語っていた。

温石のぬるくなつたものは、あらかじめ用意していた火鉢に入れた。遠巻きによその侍女たちが見ていたので、玉葉妃に了解をとつていくつか渡してあげることにした。

綿や宝玉に見慣れた侍女たちが、たかだか温めた石くらいで喜ぶのだからなんだかおかしいものである。

残念なことに水晶宮の侍女たちは、猫猫が近づくとまるで磁鉄が反発するように一定の距離を置くので渡せずじまいである。

「なんだかんだでお人よし過ぎない?」

桜花^{インファ}が呆れたように「ううん、

「やういえばそつかもれません」

思つたことを素直に伝えた。

(やういえば)

休憩になつてから、どうにも裏幕に人通りが多い。

侍女だけでなく、武官や文官が入り込んでいるようだ。

皆、片手に装飾品を持っている。

女官と一対一で向かい合つているものもいれば、数対一で囲まれているものもある。

貴園アイランと愛藍アイランも知らない武官と話しているようだ。

「ああやつて、花の園に隠れた優秀な人材を勧誘するのよ」

「はい」

「印に持つている装飾品を渡すの」

「そうですか」

「まあ、違つ意味もあるんだけどね」

「なるほど」

いつもと違つて、興味なさそうに返事するので桜花は腕組みをして唇を尖らせた。

「違つ意味もあるんですってばー」

「そりなんですか」

その意味を聞き出さうともしない。

「じゃあ、その簪ちょうだい」

「はい。でも、他の一人と猜拳じゃんけんしてください」

火鉢の温石をひっくり返しながらいった。

一年の奉公が終えたらさつさと花街に戻るつもりの猫猫には関係な

い話である。

それよりも、

(あんなのにこゝに使われるのなら、水晶宮で丁稚してたほつがまし
だな)

と、息絶えた蝉でもみるような田をしていふと、

「お嬢さん、これをどうぞ」

田の前に簪が差し出された。

顔を上げると精悍な顔をした大男が甘い笑みを浮かべている。まだ、若く髭はない。男前といわれる部類の顔をしているが、無駄に甘い笑顔に耐性の強い猫猫としては、何の感慨もなく見返すだけだった。

思つた反応と違つて武官は感づいたようだが、差し出した手はおさめられずにいる。中腰につま先立ちなので足元が震えている。

猫猫はどうやら男を窮地に立たせてくるのが自分だと気付いたらし
い。

「どうも」

猫猫が受け取ると、子犬が飼い主にほめられたような顔をした。

なんとなく駄犬っぽいと猫猫は思つ。

「んじゃあなー、よろしくー。俺、李白リハクっていうから

(たぶん、一度と会わないと思つけど)

手を振る大型犬の帯にはまだ十数本の簪がさしてある。侍女たちに恥をかかせないため、皆に配つていいのだらうか。

(それならば悪いことをした)

桃色珊瑚のついた簪をながめると、

「もうつたの?」

と、貴園たちが来た。各自戦利品を帯にこししている。

「参加賞ですが」

猫猫は感慨もなく答えた。

すると、後ろから、

「それだけでは、やみじいでしょ?」

聞き覚えのある高貴な声がする。

振り返ると、豊満な胸部、もとい梨花妃が立っていた。

(少し太ったかな)

それでも、以前の肉体には及ばない。しかし、残った陰りもまた妃の美貌を引き立てていた。濃紺の裳に空色の上着、青い肩掛けを羽織っている。

(少し寒くはないだろつか)

玉葉妃付である限り、梨花妃には肩入れができない。水晶宮を去った後も壬氏伝手にしか、容体をきいたことがなかつた。たとえ、宮を訪れても侍女たちに門前払いを食らうのはわかっているが。

「お久しううござこます」

「お久しうぶりね」

顔を上げると、梨花妃は猫猫の髪をさわる。また、壬氏のときと同じように何かがささつた。今度は痛くない。

「じゃあ、じきげんよつ」

呆気にとられるのは翡翠宮の侍女たちである。驚愕を隠しきれない妃付の侍女たちをたしなめながら、優雅に去つて行つた。

「あーあ。これは玉葉さま、すねるどいじやないかもね」

桜花が呆れた顔で簪の飾り部分をはじいた。

紅水晶の玉飾りが三つ連なり揺れていた。

昼食時間になると、**猫猫**は、**紅娘**と交代し玉葉妃の後ろについた。
 桜花の助言を聞いて、とりあえず貰つた三本の簪はすべて帯につけることにした。玉葉妃のくれたのは首飾りなので、簪は一本くらいつけていいものだが、それではつけなかつた簪と優劣がつくとのこと。

あらためて宴席を上座から眺めると、なかなか壯觀である。

西側に武官が並び、東側に文官が並んでいる。長卓に座れるのはその中の一割ほどで、高順も武官側の席に座つていた。思ったよりお偉いさんなのはわかつたが、宦官が違和感なく並んで居ることに驚いた。

さつきいた大男も座つている。高順よりも末席に近いが、年齢を考えると出世頭なのかもしれない。

壬氏は反対にどこにも見えない。あれだけきらきらしていたら、すぐ見つかりそうなものなのに。
 探す必要もないのに、本業に徹することにした。

最初に食前酒がきた。玻璃の器から銀杯に少しづつそそがれる。ゆっくり杯を揺らし、接触部分に曇りがないか目視する。砒石の毒があれば、色が黒ずんでくる。

ゆっくり回しながら匂いを嗅ぎ、口に含む。毒のないことはわかる

が、毒見役として職下しなければ、毒見として認められない。」「へんと喉を潤すと、真水で口をぬぐべ。

(おや)

(じつせんじやうめいりうじ)

他の毒見役はまだ、杯に口もつけっこない。

猫猫が何もないのを確認すると、恐る恐る杯に口をつけたのだ。

(まあ、普通はね)

誰もが死ぬのは怖い。

誰か先にやるものであれば、見届けてからやったほうが安全である。

(宴席で毒を使つとすれば、即効薬しかないだらう)

この中で好んで毒を食ひるのは猫猫くらいである。世の中にはまらない希少な人種である。

(じうせなら、河豚がいいな。内臓をつまく羹に紛れ込ませて)

あの世の先がしびれる感じがたまらないとか考えているうちに、前菜を持ってきた侍女と田があつた。口角が上がっている。気持ち悪くここにせじっていたようだ。完全に引かれているようである。いつもの無表情に顔を戻す。

受け取つた前菜は、皇帝の好物で夜食にたまにでていたものだ。

他の毒見たちが猫猫をじっと見るので、わざと箸をつけてやる。

魚と野菜のなますだ。

好色親父であるが、案外食生活は健康志向だと、毒見役はいつておく。

(配膳間違えたな)

いつもと具が違う。

皇帝の好物の調理法を間違えることはない。

あるとすれば、別の妃用に作られたものがこちらにきてこるのである。

後宮の尚食は有能で、同じ献立でも皇帝用と妃用と作り分けている。玉葉妃が授乳中はずつとお乳によじメニューを作っていた。

毒見が終わり、皆が前菜を食べているところをみると、やはり配膳を間違つたらしい。

空気の読めない里樹妃^{リーシュ}が青白い顔をしている。

(嫌いなものだつたか)

皇帝の好物という手前、残すわけにいかないものである。我慢して食べている。

後ろを見ると、毒見役の侍女が目を瞑り、唇を震わせていた。微かに弧を描いているのは、見てわかつた。

(嫌いのものを見た)

視線を戻し、次の料理を受け取った。

ただの宴席ならばよこのこと。

李白リハクは殿上から見下す高貴なたとはそりが合わなこと思つた。
なにが樂しうて、この寒さむい中、風が吹きすゞぶ中、外で宴会など
考えるのだひづ。

いや、ただの宴会ならい。古事にならひて、桃の園のなかで氣の
合あうひ回士まわしで酒をらい、肉を食むのはたゞや樂しかるべ。

しかし、高貴なおかたとともにになると、常に毒ともい一緒になる。
いかに高級素材を使い、秘伝の技を駆使した会席も毒見を終えて冷
えれば「まやは半減する。

毒見を責めるわけではないが、毎回、怯えた青い顔でゆづくと匙
を食むときは、それだけで胃の大きさを縮めるのだ。

今田もまた、同じように無駄に長い時間が過ぎるのだと想つていた。
だが、なんだかそうでもないらしい。

いつもは、毒見役が皆、顔を見合させながら匙を運ぶ順を決める。
でも今日は、やたら威勢のいい毒見役がいるようだ。

貴妃の毒見役、小柄な侍女は周りを一瞥もせず、銀杯を揺らして食
前酒を口に含む。

ゆっくり嚥下すると、何事もなかつたかのように口元をゆすぐだ。

どこかで見たことがあると思ったら、先ほど簪を渡したひとりだった。そして、目だった容貌でない、整っているが特徴がない。美形の多い後宮の女官の中ではあまたに埋もれるほうだろう。しかし、無表情のどこかに、他人を威圧する眼力を持つ娘だった。

愛想のない娘だと思ったが、表情は案外豊からしい。無表情と思えば、なぜかいきなりにやにやして、かと思えば元に戻り、今度は不機嫌な顔をする。

それなのに、当たり前のように毒見をするので、これはどうにもおかしかった。

次はどうんな顔をするやう。暇つぶしこはちよづじい。

羹を差し出され、娘が匙をいれる。目視し、舌の上にゅうくいのせる。

娘の目が一瞬、見開いたかと思えば、急にひととと蕩けるような笑みを浮かべた。

頬に赤みがさし、目が潤み始める。唇が弧を描き、半開きになつた口から白い歯と艶めかしい舌が見えた。

これだから女は恐ろしい。

唇についたしづくを舐めとるときは、熟れた果実のような最高級の妓女の笑みであった。

どれだけ美味しい料理なんだ。

平凡な娘をあれだけ妖艶にするなにかがあるのだろうか、宫廷料理人の匠の技によるものか。

「じへじと生睡を飲んだ時、娘は信じられない行動でた。

娘から手ぬぐいを取り出し、口につけると食べたものを吐き出した。

「これ、毒です」

無表情に戻った侍女は、業務事項を伝えると幕の裏側に消えていった。

宴席はどうよめきを見せながら終わりを告げた。

22 祭りの後（前書き）

クールダウン。

22 祭りの後

「随分とまあ、元気な毒見役だことだ」

口をゆすぎ終わり、ほんやりとしていた中、神出鬼没の暇人宦官が現れた。

宴席からずいぶん離れた場所にいるのによく見つけたものだ。

「！」おげんよう、ジンシ升田さま

いつもどおり無表情で返そうとするが、毒の余韻か幾分頬がゆるい。笑顔で返したようで少し腹立たしい。

「むしろ！」機嫌はそつちだわ

いきなり腕を掴まれた。

「なにするのですか」

「医務室に向かうにきまってるだる。毒食らってぴんぴんしているなんて洒落にならぬぞ」

実際、元気そのものである。

吐き出さずに飲み込んでいたらどうなつただろう。好奇心が身体をめぐる。

(吐き出せなかよかつた)

せめて残りの羹をいただけないだらうか。

壬氏にたずねてみる。

「おまえ、ばかだろ」

「向上心が高いと言つてください」

まあ、ふつゝ、そんな向上心は願い下げである。

普段、無駄にわらわらしに壬氏だが、今はなんだか違つ氣がある。頭には新しい簪が差してあるが、先ほどと変わらぬ上等の衣をつけているのに。

いや、少し襟元が乱れている。乱れることがあつたところとか。

甘露の声は幾分かすれ、柔和な笑みもそこにはなかつた。

(わらわらしこのは調整できるものなのか)

それとも情事のあとで、疲弊しているのだろうか。

宴席にいなかつたのは、女官か文官か武官か宦官を連れ込んだり、連れ込まれたりしていたのだろう。

そういうことにしておこう。

まつたくお盛んなことである。

(わらわらしこのがまだいいな)

確かに美形であるが、これなら年相応の青年に見えなくもない。いや、むしろ幾分幼く見える。

今度から来る前は、いかがわしい運動のあとにしてもうかるよう^{ガオ}高順に頼んでおくか。

聞いてもらえるかは別として。

「おまえがあんまり元気そうに出ていくもんだから、ほんとに毒か
つて食べた奴がいたんだよ」

「誰ですか、その莫迦は」

使われたのは河豚毒だった。

食べてしまらくしないと毒の効き目は表れない。

「大臣がしひれてる。あつちはそれで大騒ぎだ」

なるほど、これでは国の未来も危ないことだ。

「せつかくなので、これ使つてもらつたらよかつたのに」

胸元から『じやく』と布袋を取り出す。胸の上げ底に入っていた嘔吐
薬だった。

「胃がひつくり返るほど、よく吐けるように作つたのに」

「いや、それは毒だろ?」

呆れた口調で王氏はいった。

「こいつにも医官はいる。任せたければ問題ない」

猫猫はふと思いつき、足を止める。

「どうした?」

「お願いがあります。一緒に連れてきてもらいたいかたがいらっしゃるのですが

「だれなんだ? 一体

眉をひそめ、首を傾げる。

「徳妃、里樹さまを呼んではくれませんか」

猫猫は凛とした口調で言った。

呼び出された里樹妃は、王氏には春のような嬉しげな笑みを、猫猫にはなんだこいつという白けた顔を見てくれた。落ち着かないのか、右手で左手をさすっている。

幼くとも女という生き物である。

医務室に向かおうとしたが、お莫迦なお偉いさんのせいで人だかりができており、仕方なく使われていらない執務室を使うことにした。こつして比べてみると、建物にも後宮とそれ以外とで造りに違いがある。簡素で無骨な大部屋に里樹妃は少し不貞腐れた顔をした。

ぞろぞろ連れたお付は、高順に頼んで一人だけにしてもらっている。

猫猫は湯冷ましで解毒剤を飲む。飲まなくても平氣だが、念のためと言われ、他人の調合した薬に興味があつたので飲んだ。

やぶ医者と違い、こここの医官は優秀そうである。

河豚毒と知つていれば、解毒の意味がないことはわかつただろうが。

湯冷ましを置き、里樹妃に一礼する。

「失礼します」

「！？」

妃の左手をとり、長い袖をめくつた。白いおやかな腕が現れる。

「やつぱり」

本来、すべらかな感触のはずの肌に、赤い発疹ができていた。

「食べられないものがあるんですね、魚介の中に」

里樹妃はつむいたままだった。

「どうしてんだ？」

壬氏が腕組みをしたまま、聞いてくる。
いつのまにか、また天女のおやかさを漂わせていた。
しかし、いつもの笑みはない。

「人によつては、食べられない食物がそれぞれある場合があるんですね。魚介の他に、卵、小麦、乳製品などもありますね。かくゆう、私も蕎麦が食べられません」

明らかに驚愕の顔を見せるのは、壬氏と高順である。毒は平氣で食ひたことこわんばかりだ。

（まつとこてくれ）

一応、食べられるように努力したが、気管支が狭まり呼吸困難になつた。そもそも、食べて腹から吸収されて発疹ができるので、量の

調整が難しく治りも遅い。だから、慣らすのをあきらめた。
そのうち、もう一度挑戦してみたいと思うのだが、やぶ医者しかい
ない後宮では試すことまできないうだろ？

「なんでそれがわかつたの？」

恐る恐る妃が口を開く。

「その前に、お腹の調子は大丈夫ですか。吐き気や痙攣はなによつ
に見えますけど」

よかつたら、下剤調合しますよ、といふ言葉にぶんぶん頭を振った。
憧れの天上人の前でそれをいつのはなかなかひどい話である。ちよ
つと仕返しした。

「では、腰掛け聞いてください」

見た目によらずまめな男の高順は、椅子をひいている。それに、里
樹妃は座る。

「玉葉さまのお食事と入れ替わっていたからです。玉葉さまは好き
嫌いがないので、ほとんど主上と同じものを召し上がりますから」

それなのに、一品田も二品田も具材が違った。

「鰯とあわびですか。食べられないのは」

妃がこくりと頷く。

後ろで侍女が動搖を見せたのを猫猫は見逃さなかつた。

「これは食べられない人間にしかわからないのですが、好き嫌い以前の問題なのです。今回は、尋麻疹程度すぎましたが、時に呼吸困難、心不全を引き起します。いわば、知つていて飲んだなら、毒を盛つたことと同じことです」

毒といつ言葉に過敏に反応する。

「里樹さまは、場の雰囲気もあって言に出せないことが多かったしょうが、非常に危険な行為でござります」

猫猫は、視線をぼんやりと妃と侍女のあいだに定めた。

「ぬぬぬぬ、忘れなこよひじてください」

びかりことこうわけでもなく忠告した。

しばらく間をおいて、

「常食の配膳係にもお伝えください」

と語ったが、妃と侍女は頭にはいつていよいようだ。

猫猫はお付の侍女に、詳しく危険性を説明し、もしもの場合の対処方法を書にしたためて渡した。

侍女は青白い顔のまま、小刻みに首を振っていた。

(齧しげほんなもんか)

侍女は毒見の女だった。
あの笑っていた女である。

里樹妃が退出したあと、後方からねりとつとした空氣と、肩に触れてくる手に気が付いた。

干からびた蚯蚓を見るほつがましだといつ冷めた目をする。

「下戯のものやえ、お手を触れなこどくださりますか

べたべたするな、」の野郎を婉曲にてぶへる。

「そんなこと言つのはおまえくらこだぞ

「では、既、氣を使つてゐのですね

すたすたと離れる。

胸やけがしそうな声にため息をつき、清涼剤の高順を探すが主に忠実な従者は「頼む、耐えてくれ」と田で訴えていた。

「では、玉葉さまのもとに報告にこきますので

「なんで、わざわざ毒見の侍女を回収させたんだ？」

いきなり核心をつこしてくる、だからやりこく。

「なんのことでしょう。わかりかねますが

無表情のまま答へる。

「では、配膳のものが間違えたところのか？」

「それもわかりません

あくまでじりを切る。

「これくらいには答えてくれ。狙われたのは徳妃だということだな」

「他の皿に毒が入つてなければ」

そつこつことになる。

壬氏が考え込むのを見て、猫猫は部屋を退出するし、壁にもたれて深く息をするのだった。

22 祭りの後（後書き）

毒が決まりましたので、変更しました。

翡翠宮に戻るなり猫猫マオマオは、手厚い看護を受ける羽田になつた。

いつも使つている狭い部屋ではなく、空き部屋の寝台に上等の被褥ふとんが敷かれ、あれよあれよと着替えさせられたらその中に放り込まれた。

上等の綿を使つており、いつもの菰を重ねただけの寝台とは雲泥の差だ。

「解毒剤も飲みましたし、身体に異常はないんですが」

実を言えども、解毒剤は意味がない。そういう毒である。

「何言つてゐの？あの後、食べた大臣がすつゝかつたんだから。吐き出したからつて無事なわけないじゃない」

桜花インファは心配そうな面持ちで額に濡れた布をのせる。

(本当に莫迦な大臣だ)

初期治療でうまく吐き出せただろうか。

気になつたところで、今更、ここからでられないだろうし、仕方なく口を閉じることにした。

無駄に長い一日だった。

疲れはけつこうたまつていたらしく、起きたのは睡前だった。

侍女としてこれはまずい。

起きて着替えると、紅娘ホンニヤンを探すこととした。

(やのまえに)

浴室に戻り、いつも使っているおしろいを探す。おしろいについても、齒が使っている真っ白なものではなく、いつものそばかすをつくるものだ。

磨いた銅板を鏡に、指先で刺青の周りをとんとん叩く。小鼻の上を特に濃く塗る。

(今更、すっぴんはねえ)

いちいち説明するのが面倒だ。

いつそ、逆にそばかすを隠したことにしてしまえばいいのかと思つたが、これはこれで恥ずかしい。たぶん、言われるたびに女の道が初めて通つたときのような反応をしてしまうだらう。

お腹がすいていたので点心の残りの月餅を一つ食べた。

ギョクヨウ

紅娘は玉葉妃エイエイヒのもとで公主の面倒を見ていた。

はいはいで動き回る公主に目を離せないようで、床の敷布の上からはみ出さないように移動させたり、つかまり立ちの練習で椅子が倒れないので押さえていた。

「寝坊し、申し訳ありませんでした」

深く一礼する。

「今日は休んでもよかつたの」

玉葉妃は困り顔で頬に手を当じ、首を傾げている。

「いつもこきません。なにかあればお申し付けください」

などといふが、実際、普段から好き勝手にしゃべっているのでこでもいなくても問題はないだろ？

「そばかす……」

玉葉妃はあまり触れてほしくない」とを突っ込んでくる。

「落ち着かない」ので、「のままによひこ」でしょうか

「それもそうね」

意外にも、簡単に引き下がった。

猫猫は、怪訝な顔を妃に向ける。

「あの侍女は一体何者だつて。みんなから詰め寄られたのよ。大変だつたわ」

「申し訳」やいません」

「その顔だと、一回じゃわからないから都合がいいわね」

穩便に動いたつもりだが、それでもなかつたらしい。一体なにがいけなかつたのだろう。

「それと、朝から高順カオシユンが来ているけど、どうする？ 暫うなので、

外で草むしりしてもいいところなんだナビ

(草むしり……)

たしか、けつこつな高順だつたと思つが、さすがまめ男である。きっと、他の侍女たちの心をむんずとつかんでいるに違ひない。

「居間を貸していただきよろしこうじょうか?」

「わかつたわ。すぐ呼ぶわね」

玉葉妃は紅娘から公主を受け取る。

紅娘は部屋をでて高順を呼びに行つた。

自分からいけば早かつたのだが、玉葉妃に手で制せられ、そのまま居間に移ることになつた。

「シンシ十代さまからこれを」

来るなり挨拶もせずに、高順は布包みを卓においた。

ひらくと銀の器に盛られた羹があつた。

猫猫が食べたものでなく、本来、玉葉妃が食べるはずだつたものだ。昨日は断つたが、結局、二丁寧に持つてきてくれた。

「食べないでください」「食べません」

(銀は腐食が激しいからな)

食べない理由が他にあることを高順はわからないだろう。
疑わしげにこちらを見ている。

猫猫は器に直接触れないように持り、皿を細めてじっと見た。
器の中身ではなく、器 자체を。

「これは、素手で持つたりしましたか？」

「いいえ。毒か中身を匙でとつただけです」

毒物を触るのも嫌だとこづらじく、布で触れずに包み込んだといふ。
それを聞いて、猫猫は唇をゆがめる。

「なるほど。少しお待ちください」

猫猫は居間を出ると、台所へと向かう。
「じゃあそとあるものをとりだす。

次は先ほど眠っていた寝室へ。
上等の褥に頭を下げ、布と布の縫い目をほざき、中身を取り出し居
間に戻る。

持ってきたのは白い粉と柔らかそうな綿だった。

猫猫は綿を丸めると、粉をつける。

それをぽんぽんと銀の器にはいた。

高順は首を傾げ、のぞきこんでくる。

「これは？」

器に粉のあとが残る。

「人間の手が触れた後です」

指先は油が出やすく、金属など触ると少しのあとが残るのだ。
腐食の激しい銀食器ならなおのことだろう。

昔、おやじどのが猫猫の悪戯防止にと、触つてはいけない器に染料をつけていたことがあった。

それを参考にして、思いつきでやつてみたら案外うまくいくものである。粉の粒子がもつと細かければ、もう少しほつきり見えただろう。

「銀食器は使う前に必ず布で拭きます。くもりがあつては意味がありませんので」

食器には指のあとがこくつかついている。
指の大きさと位置どどのよう持つているのかくらには推測できそうだ。

(さすがに模様までは読み取れないな)

「器を持ったのは……」

言いかけてしまつたと思った。

それを逃す高順でもない。

「いかがしましたか？」

「いいえ」

下手に隠し立てしようと意味はない。

昨日の「まかしは無駄になるがしょうがない。

「全部でおそらく四人。」この器を触れていますね

指先が触れないうちに白い模様をはじけていく。

「食器磨きは指をつけることがないので、あつもの羹をよそったもの、配膳したもの、それと徳妃の毒見役ともうひとりの誰か」

高順が精悍な顔をあげて猫猫を見た。

「なぜ毒見役が？」

できれば穏便にすませたい。

それは、この寡黙な男の器量次第である。

「簡単なことです」

猫猫は器を置いた。

顔に苦味が走る。

「こじめですよ

「いじめ……」

高順カオシュンは信じられない顔をする。

それはそうだ。上級妃に對して侍女が、そのよつなことするなどあつてはならない。ありえないのだ。

「信じられないよつですね」

むかひムカヒが知りたがらないよつなら、猫ネコも話ハタツは思オモわない。憶測ヨクセツでものをこうのは好きではない。

しかし、侍女がなぜ器に触れたのか説明するには、それを話す必要がある。

下手なごまかしを入れるより正直に意見を述べることにした。

「聞かせてもらりますか？」

「わかりました。これはあくまで私の憶測であることを前もって言ハナヘリつておきます」

「問題ありますん」

まず、里樹妃リツキヒの特殊な立場から述べる。

幼いながら先帝の妃となり、そしてすぐに出家する羽田ヒタとなる。多くの女は、夫に妻は身を以つて死くよう教育される。育ちがいいものほどそれが顯著だ。

たとえ政略とはいえ里樹妃が、亡くなつた夫の息子のもとに嫁ぐなど不徳も甚だしいということだ。

「里樹妃の園遊会の衣をみましたか？」

「……」

「空氣、読めてませんでしたよね」

しかし、お付のものは皆、白に準ずる衣を着ていた。

「普通なら、侍女は妃にまともな衣装をすすめるなり、もしくは合わせて準ずる衣を着るなりするはずです。でもあれは、まるで里樹妃が道化にしか見えなかつた」

侍女は主を立てるものである。それは、紅娘(ホンニヤン)が他の侍女に言い聞かせている言葉である。それは、園遊会の際、桜花(イシカ)のいつた言葉でも如実にわかる。

そのように考えれば、里樹妃の衣装のことで侍女同士がもめていた件も違う見方が出てくる。

（ふがいない里樹妃の侍女たちを淑妃の侍女たちがいさめていた）

年若い里樹妃は、侍女におだてられて似合つからとあの衣装をつけたに違ひない。

何の疑いもなく。

「それだけでなく、食事を入れ替えて里樹妃を困らせようとしたと
「ええ。結果として命拾いをしましたけど」

河豚の毒は、しばらくたたねば効果はない。

つまり、入れ替えていなければ、毒見が無事だと思い口にしていただろう。時間は十分にある。

「いやなやり方です」

(憶測はそこまでにして)

器を再び手に取り、指をさす。

「これは多分、毒をまぜたものの指のあとでしょう。ふちを押されても毒を混ぜられたのかと」

食器のふちに触れてはいけない。それも、紅娘の教えである。やんじ」となきかたの唇が触れる場所を指で汚してはならないからだ。

「私の見解は以上です」

高順は顎をさすって銀食器を見ていた。

「ひとつ聞いてよこですか」

「何でしょり?」

食器を包み、高順に渡す。

「なんで、あの侍女をかばおつとしたのですか?」

怪訝に見る猫猫に対し、高順は興味本位です、と付け加えた。

「妃に比べたら侍女の命などたやすくものですが

まじめや、毒見役なりば。

高順は、いわんとしたことがわかつたらじへ軽く頷く。

「王氏をまほづまく説明します」

「あつがとうござります」

高順が退出したのを見送ると、猫猫はどうそと椅子に腰かけた。

「やうだよね。お礼はしないとな」

（せつかく取り換えてくれたんだから）

やつぱり、飲み込んでおけばよかつたなあ、と思ひながら。

「以上で終ア」です

高順の報告を聞き、王氏は髪をかきあげた。
机には書類が重ねられ、判を待つている。

「こつ聞いてもおまえの物言つまつこなあ
「やつでしょつか」

精悍な従者はにべもなく言つ。

「どう考へても内部犯だよな

「状況からはそうなります」

頭が痛くなる。

思考を放棄したい。

なにせ、昨日から眠る暇もない。
着替えもできていない。

地団太を踏みたくなる。

「素が出てきていますよ」

普段の笑顔はなく、年相応に不貞腐れていた。
それが高順にはつきりわかるらしい。

「誰もいないからよくないか?」

「私がいます」

「そこはおまけで」

「ダメです」

軽口を聞いてみると、生真面目なこの男には通用しない。
生まれたときから面倒をみられるのも厄介なものである。

「簪、さしたままです」

「ああ、いけね」

「隠れていたので、気づくものはいないかと」

深くささつた簪を引き抜くと、匠の透かし細工が現れる。
鹿とも馬とも言い難い伝説の動物は麒麟といった。

「頼むわ、保管」

無造作にそれを投げつける。

「大切にしてください。大事なものなのですから」

「わかつてゐるよ」

「わかつてません」

お小言を言い終えると、十六年来の世話役は執務室をあとにした。

壬氏は、子どもの顔のまま、机に突っ伏した。

仕事はたくさん残っている。

はやく暇を作らねば。

「やるか」

大きく背伸びをして筆をとる。

暇人になるために、仕事を終わらせなければならなかつた。

24 麒麟（後書き）

まあ、『想像のとおりですね。』

「じつや、くだんの毒殺騒ぎはけつこつ大事らしき。
小蘭は猫猫に食つてかかるよつに聞いてくる。

洗濯小屋の裏は、下女たちの駄弁り場所スポットとなつてゐる。そこで、木箱の上に座り、団子のよつに連なつた山査子を食べる。

(おやか当事者だとは思つまつ)

小蘭の山査子を頬張りながら足をぶらりぶらりさせぬ年齢よりも幼く見える。

「猫猫のところの侍女なんでしょ。毒食べたのつて
「もうだけど」

嘘は言つてない。

「何か知らないけど、何者だつて話なんだけど。大丈夫なわけ?」
「そうだね」

なんだかとても居心地が悪いので何度もほぐらかすと、小蘭は仕方ないと口を尖らせた。

小蘭は一粒残つた山査子の弔をぶらりぶらりむかへる。まるで血赤珊瑚の玉簪たまがんざしのよつである。

「じゃあさあ。簪とかもうつたりした?」

「一応」

義理を含む、計四つ。玉葉妃^{ヤクタヒ}の首飾りもいれておく。

「いいなあ。じゃあ、いつから出でられるんだね

(ん?)

「今、なんて言つた?」

「えつ? いつから出るんじゃないの」

桜花^{イシカワ}がしつこく言つていた。

それを聞き流していたのは自分だった。

失敗したと頭を抱える。

かぶりをふり自己嫌悪に陥る。

「どしたん?」

怪訝に眺める小蘭を見た。

「それ、詳しく教えて」

いつになくやる氣のある猫猫を見て、小蘭は胸を張る。

「あー、わかった

おしゃべり娘は簪の使い方にについて教えてくれた。

李白^{リハク}

李白が呼び出されたのは、修練のあとのことだった。

汗を拭きつつ、刃びきした剣を部下に渡す。

なよなよしい宦官は、木簡と女物の簪を渡した。

桃色珊瑚の飾りのついたそれは、以前、幾多も配つたうちの一につに過ぎない。

義理とわかつて本気にしないと思つていたが、ビックやハラハラでもないらしい。

恥をかかせるのも悪いが、本気にされるのも困つものである。しかし、美人であればもつたまらない。

やんわり断る言葉を考えながら、木簡を見る。

『翡翠宮 猫猫』

そのように書かれていた。

翡翠宮の女官にはひとりしか渡していない。

あの無愛想な侍女にしか。

はてはてと、顎をさすりながら李白は着替えの準備をした。

後宮内は基本男子禁制である。

べつに切り落としたわけでもない李白は、当然禁断の園である。今後はいることもなかろうし、あつたら困る。

そんな恐ろしい場所であるが、特別な許可を取れば、中の女官を呼ぶことができる。

その手段がこの簪だった。いくつかの手段のひとつである。

中央門の詰所を借り、呼び出し人を待つ。

さして広くない部屋には机と椅子が一人分、両側の扉の前には宦官がひとりずつ立っている。

後宮側の扉から、痩せた小柄な侍女が現れた。鼻の周りにそばかすとしみがおおつていた。

「誰だ、おまえ？」

「よく言われます」

無愛想に淡々と話す侍女は、手のひらで鼻の周りを隠した。見たことある顔が現れる。

「化粧で化けるって言われないか？」

「よく言われます」

不機嫌な様子もなく事実として受け止めている。なんとなく理解できる。

あの毒見役の侍女であると。

しかし、しみだらけの顔を見るとどうにもあの妖艶な妓女とつながらない。

まったくもって不思議なものだ。

「しかし、また俺を呼び出すなんて、どういう意味かわかっているのか？」

腕を組み、足も組む。

身体の大きな武官が偉そつと座る中、小柄な娘は物怖じもせず言つてくれる。

「実家に戻りたいと思いまして」

何の感慨もなく言つのである。

李白は頭をかきむしむ。

「それで、俺に手伝えと?」

「ええ。身元を保証していただければ、一時帰宅は可能と聞きましたので」

とんでもない」と言い出すものである。

本来の意味をわかつてているのか、と聞き出したい。

びうじよこの猫猫という娘は、自分を里帰りのために利用しようと
しているらしく。武官をつかまえてやることではない。

豪胆とこうやら、命知らずとこうやら。

李白は頬杖をつき、鼻を鳴らす。

態度が悪いといわれようど、正す気もならない。

「なんだ?俺は嬢ちゃんにづまく利用されりつてことか?」

李白は、好漢だといわれているが、睨み付けるとそれなりに恐ろしい顔である。

急げる部下を叱つづけると、関係ないものまで謝つてくる程度に。

それなのに、眉一つ動かそうともしない。
感慨なく、眺めているだけである。

「いいえ、こちらもそれなりにお礼ができないかと」

猫猫は机の上に、束ねた木簡を置く。
紹介状のように見える。

「梅梅^{メイメイ}、白鈴^{バイリン}、女華^{ジョカ}」

女の名だ、李白には聞き覚えがあった。いや、李白以外にも多くの男どもが知っているはずだ。

「縁青館で花見はいかがかと」

一晩で一年分の銀がなく、高級妓楼の名前だった。

「心配なうば、これを見せねばわかります」

娘は唇を歪ませただけの笑みを向けていた。

「冗談だろ?」「お確かめを

まったく信じられないことである。

たかだか、侍女程度に高級官僚もなかなか手を出せない妓楼に伝手があるとは考へにくい。
どうこうことだ。

わけがわからないと頭をまたかきむしると、娘はふとため息をつき立ち上がった。

「どうしたんだ？」

「信じていなによつですの。お手間をかけました」

すつと胸元から何かを取り出す。

一本の簪、紅水晶と銀製のものだ。

「申し訳ありませんでした。他を当たりますので」

「じゃ、じゃ」

持つていろいろとした木簡を押さえゐる。

表情のない猫猫の目が李白を見ていた。

「どうなさいますか？」

負けたと思った。

「よかつたんでしょうか？玉葉さま」

ホンニヤン
紅娘は扉の隙間から、猫猫を見る。普段に比べ血色がよく、つまうきと荷造りをしている。

本人はあれでいつもどおりのつもりだから不思議なものだ。

「まあ、三日だけだしね」「なんんですけど」

侍女頭は自分につかまつ立ちじょひある公主を抱き上げる。

「絶対、わかつてないでしょ」
「うけい

「そうね、絶対」

他の侍女たちは、猫猫に「おめでとう」と伝えているのだが本人はわかつてないらしい。お土産買つてみると呑氣な返事をしている。

玉葉妃は窓辺に立ち、外を眺める。

「まつたく、可哀そうなのはあの子だわ

ふつと、ため息をつくが、そこに悪戯な笑みが浮かんでいた。

仕事を片付けてようやく暇人になつた王氏^{シンシ}が翡翠面をおとすられるのは、猫猫の出発した翌日のことである。

25 李白（後書卷）

フラグクラッシャー

帰りたい、帰りたいといつっていた花街は、それほど遠い場所ではない。

後宮ひとつで町ひとつと変わらない大きさだが、それをすっぽり囲むのが王都である。

花街は宫廷の反対側にあり、高い壇と深い堀をこえれば、歩いて行ける距離にある。

(馬車で行くなど贅沢なのに)

隣に座る大男、李白リハクは馬の手綱を持つて鼻歌を歌っている。木簡を渡し、話が本当だとわかつたからだ。

憧れの妓女に会えるなら、そんなものなのだろうか。

妓女と言つても、一括りにしてはいけない。

身を売るものもいれば、薬ヤクを売るものもいる。

売れっ子と言われるものもび、密モミは多くどうなし。それによつて希少価値を上げるためにだ。

茶を一つ飲むのに銀をいくらでも払わねばならない、夜伽などもつてのほかだ。

そんな奉られた存在は、一種の偶像となり、市民の憧れとなるのである。

町娘の中には、憧れて遊郭の門をたたく者もいる。それになれるのはほんの一握りだというのに。

緑青館ろくしょうかんは王都の花街の中でも老舗で、中級から最上級の妓女ぎじよを取り

揃えている。

その最上級の中に、**猫猫**が小姐と呼ぶものたちがいる。

がたんがたんと揺れる馬車から懐かしい風景が見える。食べたかつた串焼き屋は、香ばしい匂いを通りにまき散らしていた。水路に沿い柳が揺れ、薪売りが声を上げている。

豪奢な門をくぐると、極彩色にまみれた世界が広がっている。まだ昼間というだけに、人通りも少ないが暇な遊女が一階の欄干から手を振っている。

一際大きな門構えを持つ楼閣の前で馬車は止まった。

猫猫は軽い足取りで馬車を降りると、入口に立つ老婆に駆け寄った。

「ひさしぶり、婆さん」

煙管きせんを噛む瘦せた女にいった。その昔、真珠の涙を持つと言われた遊女は、今では、涙も枯れ果て枯木のようになつていて。身請けも断り、年季が明けても居残り続け、今では誰もが恐れるやり手婆になつていて。時は残酷だ。

「なにが、ひさしぶりだい。こん莫迦娘ばかむすめ」

みぞおちに衝撃が走る。

胃液が逆流し、口の中が酸っぱくなるのも懐かしいと思つのだから不思議なものだ。

過去、何度これで摂取量をこえた毒物を吐き戻したことだろう。

基本、お人よしの李白はわけがわからないまま、猫猫の背中をさす

つてゐる。

なんだ、この婆と顔が語つていた。

汚した地面をつま先で土をかける。隣の李白は心配せうに猫猫を見る。

「ふーん、これが上客かい？」

「値踏みをするよつて李白を眺める。
馬車は店の男衆おとこしゆうにあづけた。

「いい体格だね。顔立ちも男前だ。話によると、出世株しゆみたいじゃないか」

「婆ちゃん、それ、本人の目の前でこいつのビツひづよ」

やり手婆は素知らぬ顔で、門前を掃除する禿かぶを呼ぶ。

「白鈴呼んできな。今日は、茶挽きのはずだ」
「白鈴……」

李白が、じくじくと喉を鳴らす。

舞踊が得意と聞く名の知れた妓女である。

李白の名誉のためにこいつておくが、それは単なる遊び女に対する情欲でなく、憧憬の思いである。

雲の上の偶像に、田の前で会える」と、茶を同席することでも、「名誉なのだか」と。

(白鈴小姐かあ、ひょっとしたらひょっとするかもなあ)

「李白わね」

猫猫は隣で呆けている大男をつつく。

「上腕二頭筋に自信はありますか？」

「よくわからんが、身体は鍛えているつもりだぞ？」

「わうですか。うまくやつてくださいね」

首を傾げる大男は、女童に連れられて行つた。

猫猫としては、ここまで連れてきてくれたことに感謝している。やはり、それ相応にお返しもしたいわけである。

一夜の夢が見られれば、一生の思い出になるだらう。

「猫猫」

しわがれた声の主は、恐ろしい笑みを浮かべている。

「十月も連絡よこさず消えやがつて」

「しかたないだろ、後宮で働いてたんだから」

木簡にしたためて、大体の説明はしてある。

「一見お断りのところを、こんだけ面倒見てやつたんだ」「わかつてゐるつて」

懐から袋を取り出す。

今まで後宮で働いた給金の半分だ。

「こんだけじゃあ、足りないねえ」

「まさか、白鈴小姐だすとは思わないけど」

上級妓女なら一晩いい夢を見ておつりがくるはずだった。

「お茶位ならきり負けてくんない?」

「莫迦。あの腕っぷしで白鈴が何もしないわけないだろ」

(やつぱつ)

最上級の妓女は身を売らない」というが、恋をしないわけじゃない。
まあ、そういうことである。

「それって不可抗力……」

「なわけあるかい。ちゃんと勘定に入れとくからね」

「払えないって」

(残りをいれても足りないなあ。どう考へても)

考へ込む猫猫。

「なあに、最悪、身体で払えばいいことさ。お上から女郎屋にうつ
るだけだ、かわりないさ。おまえみたいな傷物でも、すき好む好事
家はいるからね」

「年季まだ一年残つてんだけど」

「なら、上客どんどんよこしな。爺じゃなくて、さつきみたいな長
く適度に搾り取れそうなのをさ」

(ついで。やつぱり搾り取られるか)

強欲婆は算段しか頭にない。

身売りはもうけつこうなので、今後、生贊を適度に送らなければならなくなつた。

(実戦でも客になるのか)

壬氏の顔が浮かんだが、あれはダメである。

妓女たちが本気になり、店がつぶれかねないので却下である。

だからといって高順^{ガオシユン}ややぶ医者には悪い気がする。やり手婆に搾り取らせるまねはしがたい。

出会いの場がないといつのは、本当に不便なものだ。

「猫猫、爺^{じいじ}はいま家にいるはずだから、わざわざこつてやんな

「ああ、わかつた」

深く考へても今のところ解決策はない。

猫猫は縁青館の脇道を抜けた。

通りを一つ抜けると、花街はとたんにさびしいものとなる。
掘立小屋が立ち並び、割れた茶碗に錢がたまるのを待つ物乞いや、や
梅毒のあとが見える夜鷹^{よだか}もいる。

寂れた小屋のひとつが猫猫の家である。

一間の土間しかない狭い家に、背を丸め、すり鉢をするものがいる。
深くしわの刻まれた、柔らかい輪郭をした、まるで老婆のような男
である。

「ただいま。おやじ」

「おひへ、遅かったね」

普段通りの挨拶をし、何事もなかつたかのよつよつだけた足取りで茶を用意する。

使い古された湯飲みに茶を入れるのでそれをいただく。
ぽつぽつと今まであつたことを話すと、おやじどのはそれに相槌をうつだけだった。

薬草と芋でかさ増しした粥を夕餉になると、縁青館でもじらご湯もせずに眠ることにした。

夜は、土間に菰イモチを敷いただけの簡素な寝床に丸くなつた。
おやじどのは上から着物を重ねて着せ、竈の火を絶やさぬようすり鉢をすつていた。

「後富か。因果だねえ」

おやじどのがつぶやいた言葉は、眠気の奥に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9636x/>

薬屋のひとりごと

2011年11月9日20時20分発行